

基本計画書

基本計画									
事項	記入欄						備考		
計画の区分	研究科の専攻の設置								
フリガナ設置者	ガッコウキョウトノキョウチンガクエン 学校法人 京都橘学園								
フリガナ大学の名称	キョウトチバナダイクアガクイン 京都橘大学大学院（Kyoto Tachibana University Graduate School）								
大学本部の位置	京都府京都市山科区大宅山田町34番地								
大学の目的	本大学院は、教育基本法および学校教育法の規定に基づき、学術の理論および応用を教授研究し、その深奥を究めて、社会の進展と文化の向上に寄与する人材を育成することを目的とする。博士前期課程は、学部教育の基礎の上に、専攻分野における研究能力または高度の専門性を要する職業等に必要な能力を養う。博士後期課程は、専攻分野について、研究者として自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力およびその基礎となる豊かな学識を養う。								
新設学部等の目的	健康科学研究科健康科学専攻(博士前期・後期課程)は、こころとからだに多角的な視点から科学的にアプローチし、現代社会に生きる人々の心身の健康を守り、その向上と新しい生き方の創出に資することのできる、卓越した専門性および実践能力、ならびに高度な研究能力を有する人材を養成することを目的とする。								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	【基礎となる学部等】 健康科学部 心理学科 理学療法学科 救急救命学科 14条特例の実施
	健康科学研究科 [Graduate School of Health Sciences]	年	人	年次人	人		年 月 第 年次	京都府京都市山科区 大宅山田町34番地	
	健康科学専攻 (博士前期課程) [Master's Program in Health Sciences]	2	12	—	24	修士(健康科学) 【Master of Health Sciences】	令和3年4月 第1年次		
	健康科学専攻 (博士後期課程) [Doctoral Program in Health Sciences]	3	3	—	9	博士(健康科学) 【Doctor of Health Sciences】	令和3年4月 第1年次	同上	
	計		15	—	33				
同一設置者内における変更状況（定員の移行、名称の変更等）	国際英語学部 国際英語学科〔定員増〕 (30) (令和2年3月認可申請) 経済学部 経済学科 (240) (令和2年4月届出) 経営学部 経営学科 (260) (令和2年4月届出) 工学部 情報工学科 (130) (令和2年4月届出) 建築デザイン学科 (80) 現代ビジネス学部（廃止） 経営学科 (△180) 都市環境デザイン学科 (△150) ※令和3年4月学生募集停止 健康科学研究科 健康科学専攻（修士課程）（廃止） (△12) ※令和3年4月学生募集停止								

	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数		
		講義	演習	実習	計			
教育課程	健康科学研究科 健康科学専攻 (博士前期課程)	36科目	6科目	4科目	46科目	理学療法学コース 30単位 臨床心理学コース 43単位 心理学コース 30単位 救急救命学コース 30単位		
	健康科学研究科 健康科学専攻 (博士後期課程)	4科目	12科目	0科目	16科目	14単位		
教員組織の概要	学部等の名称	専任教員等						兼任 教員等
		教授	准教授	講師	助教	計	助手	
新設 分	健康科学研究科	15人 (15)	9人 (9)	3人 (3)	0人 (0)	27人 (27)	0人 (0)	12人 (12)
	健康科学研究科 健康科学専攻 (博士前期課程)	12 (12)	5 (5)	3 (3)	0 (0)	20 (20)	0 (0)	4 (4)
	計	15 (15)	9 (9)	3 (3)	0 (0)	27 (27)	0 (0)	— (—)
	文学研究科	16 (16)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	19 (19)	0 (0)	3 (3)
	文学研究科 歴史文化専攻 (博士前期課程)	9 (9)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	1 (1)
	現代ビジネス研究科	14 (14)	8 (8)	3 (3)	0 (0)	25 (25)	0 (0)	1 (1)
	現代ビジネス研究科 マネジメント専攻 (博士前期課程)	11 (11)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	16 (16)	0 (0)	0 (0)
	看護学研究科	9 (9)	7 (7)	5 (5)	0 (0)	21 (21)	0 (0)	31 (31)
	看護学研究科 看護学専攻 (博士前期課程)	8 (8)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	2 (2)
	看護学研究科 看護学専攻 (博士後期課程)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (3)	0 (0)	0 (0)
既設 分	教職保育職支援室	0 (0)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	81 (81)
	看護教育研修センター	42 (42)	19 (19)	9 (9)	0 (0)	70 (70)	0 (0)	— (—)
	計	57 (57)	28 (28)	12 (12)	0 (0)	97 (97)	0 (0)	— (—)
合計		57 (57)	28 (28)	12 (12)	0 (0)	97 (97)	0 (0)	— (—)
教員以外の職員の概要	職種	専任		兼任		計		
	事務職員	73人 (73)		62人 (62)		135人 (135)		
	技術職員	1人 (1)		13人 (13)		14人 (14)		
	図書館専門職員	2人 (2)		13人 (13)		15人 (15)		
	その他の職員	0人 (0)		0人 (0)		0人 (0)		
	計	76人 (76)		88人 (88)		164人 (164)		

大学全体

校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計					
	校 舎 敷 地	66,213 m ²	0 m ²	0 m ²	66,213 m ²					
	運 動 場 用 地	3,203 m ²	0 m ²	0 m ²	3,203 m ²					
	小 計	69,416 m ²	0 m ²	0 m ²	69,416 m ²					
	そ の 他	5,490 m ²	0 m ²	0 m ²	5,490 m ²					
合 計	74,906 m ²	0 m ²	0 m ²	74,906 m ²						
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計					
		61,889 m ² (61,889 m ²)	0 m ² (0 m ²)	0 m ² (0 m ²)	61,889 m ² (61,889 m ²)					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設			大学全体		
	64 室	32 室	55 室	8 室 (補助職員 7 人)	6 室 (補助職員 2 人)					
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称		室 数						
		健康科学研究科 健康科学専攻		26 室						
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	図書・学術雑誌・ 視聴覚資料は学部 単位での特定不能 なため、大学全体 の数 大学全体での 共用分 機械・器具、標本 5,487点 大学全体の契約 データベース28種		
	健康科学研究科 健康科学専攻	270,216 [45,672] (270,216 [45,672])	3,830 [334] (3,830 [334])	122 [122] (122 [122])	13,595 (13,595)	590 (590)	38 (38)			
	計	270,216 [45,672] (270,216 [45,672])	3,830 [334] (3,830 [334])	122 [122] (122 [122])	13,595 (13,595)	590 (590)	38 (38)			
図 書 館		面 積		閲 覧 座 席 数		収 納 可 能 冊 数		大学全体		
		4,232 m ²		521		366,000				
体 育 館		面 積		体 育 館 以 外 の ス ポ ー ツ 施 設 の 概 要				大学全体		
		6,680 m ²		弓道場	テニスコート1面	クラブハウス棟				
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経 費 の 見 積 り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	研究科単位での算 出不能なため、基 礎となる学部との 合計 図書費には電子 ジャーナル・データ ベースの整備費(運用コスト 含む)を含む。
		教員1人当り研究費等		450 千円	450 千円	450 千円	— 千円	— 千円	— 千円	
		共同研究費等		2,226 千円	2,226 千円	2,226 千円	— 千円	— 千円	— 千円	
		図書購入費	4,570 千円	4,565 千円	4,485 千円	4,415 千円	— 千円	— 千円	— 千円	
	設備購入費	15,933 千円	8,909 千円	8,942 千円	8,962 千円	— 千円	— 千円	— 千円		
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
	健康科学専攻 博士前期課程 理学療法学コース	725 千円	525 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円			
	健康科学専攻 博士前期課程 臨床心理学コース	875 千円	675 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円			
	健康科学専攻 博士前期課程 心理学コース	725 千円	525 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円			
	健康科学専攻 博士前期課程 救急救命学コース	725 千円	525 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円			
健康科学専攻 博士後期課程	725 千円	525 千円	525 千円	— 千円	— 千円	— 千円				
学生納付金以外の維持方法の概要			完成時までの運営費は学納金の他、入学検定料、寄付金他をもってこれに 充てる。							

既設大学等の状況	大学の名称	京都橘大学大学院							所在地
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学員定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	
		年	人	年次人	人		倍		
	文学研究科 歴史文化専攻 (博士前期課程)	2	6	—	12	修士(文学)	0.74	平成29年度	京都府京都市山科区大宅山田町34番地
	歴史文化専攻 (博士後期課程)	3	2	—	6	博士(文学)	0.16	平成29年度	
	現代ビジネス研究科 マネジメント専攻 (博士前期課程)	2	6	—	12	修士(マネジメント)	0.50	平成29年度	
	マネジメント専攻 (博士後期課程)	3	2	—	4	博士(マネジメント)	1.00	平成31年度	
	文化政策学研究科 文化政策学専攻 (博士前期課程)	2	—	—	—	修士(文化政策学)	—	平成15年度	※平成29年度より学生募集停止
	文化政策学専攻 (博士後期課程)	3	—	—	—	博士(文化政策学)	—	平成15年度	※平成31年度より学生募集停止
	看護学研究科 看護学専攻 (博士前期課程)	2	8	—	16	修士(看護学)	0.49	平成20年度	
	看護学専攻 (博士後期課程)	3	3	—	9	博士(看護学)	0.77	平成26年度	
	健康科学研究科 健康科学専攻 (修士課程)	2	12	—	24	修士(健康科学)	0.70	平成28年度	

既設大学等の状況	大学の名称		京都橋大学						開設年度	所在地	
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率				
		年	人	年次人	人		倍				
	文学部						1.09				
	日本語日本文学科	4	85	—	325	学士(文学)	1.14	昭和42年度	京都府京都市山科区大宅山田町34番地	※平成30年度入学定員増(15人)	
	歴史学科	4	100	—	390	学士(文学)	1.05	昭和42年度		※平成30年度入学定員増(10人)	
	歴史遺産学科	4	55	—	215	学士(文学)	1.08	平成9年度		※平成30年度入学定員増(5人)	
	国際英語学部						1.05				
	国際英語学科	4	90	—	360	学士(国際英語)	1.05	平成29年度			
	発達教育学部						1.04				
	児童教育学科	4	140	—	560	学士(児童教育学)	1.04	平成29年度			
	人間発達学部						—				
	児童教育学科	4	—	—	—	学士(児童教育学)	—	平成22年度		※平成29年度より学生募集停止	
	英語コミュニケーション学科	4	—	—	—	学士(英語コミュニケーション学)	—	平成22年度		※平成29年度より学生募集停止	
	現代ビジネス学部						1.03				
	経営学科	4	180	—	720	学士(経営学)	1.04	平成27年度			
	現代マネジメント学科	4	—	—	—	学士(マネジメント学)	—	平成17年度		※平成27年度より学生募集停止	
	都市環境デザイン学科	4	150	—	580	学士(都市環境デザイン学)	1.02	平成20年度		※平成30年度入学定員増(20人)	
	看護学部						1.09				
	看護学科	4	95	—	380	学士(看護学)	1.09	平成17年度			
	健康科学部						1.04				
	心理学科	4	90	—	350	学士(心理学)	1.02	平成24年度		※平成30年度入学定員増(10人)、平成30年度より3年次編入学定員5人募集停止	
	理学療法学科	4	66	—	258	学士(理学療法学)	1.01	平成24年度		※平成30年度入学定員増(6人)	
	作業療法学科	4	40	—	120	学士(作業療法学)	1.07	平成30年度			
	救急救命学科	4	50	—	200	学士(救急救命学)	1.12	平成28年度			
	臨床検査学科	4	80	—	240	学士(臨床検査学)	0.95	平成30年度			
	心理学科 (通信教育課程)	4	180	3年次 180	1,080	学士(心理学)	0.50	平成24年度			
附属施設の概要		該当なし									

教育課程等の概要																
(健康科学研究科 健康科学専攻 (博士前期課程))																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
共通基礎科目	健康科学特論Ⅰ	1前	2			○			3	3					オムニバス・共同(一部) オムニバス・共同(一部) 兼2 オムニバス オムニバス ※演習 ※演習 オムニバス 兼3 オムニバス オムニバス 兼1 オムニバス オムニバス オムニバス オムニバス 兼6	
	健康科学特論Ⅱ	1後	2			○			4	1	1					
	研究倫理学特論	1前	2			○										
	健康科学研究法特論Ⅰ	1前		2		○			1	1						
	健康科学研究法特論Ⅱ	1後		2		○			1							
	心理統計学特論	1・2前		2		○				1						
	脳科学特論	1・2前		2		○			3							
	健康心理学特論(心の健康教育に関する理論と実践)	1・2前		2		○				1						
	精神医学特論(保健医療分野に関する理論と支援の展開)	1・2前		2		○										
	救急医学特論	1・2前		2		○			2							
	精神薬理学特論	1・2前		2		○										
	生活支援学特論	1・2前		2		○			1		1					
	運動機能学特論	1・2前		2		○			1		1					
	発達障害特論(福祉分野に関する理論と支援の展開)	1・2後		2		○				2						
小計(14科目)		—	6	22	0		—	10	7	2	0	0		兼6		
専門領域科目	理学療法学領域	a群	生活機能障害理学療法学特論Ⅰ	1後		2		○			1		1			オムニバス・共同(一部) ※演習 兼1 オムニバス ※演習
		b群	生活機能障害理学療法学特論Ⅱ	1後		2		○			1		1			
	c群	運動器障害理学療法学特論Ⅰ	1後		2		○					2				オムニバス・共同(一部) オムニバス・共同(一部) ※演習
		運動器障害理学療法学特論Ⅱ	1後		2		○				2					
	d群	脳機能障害理学療法学特論Ⅰ	1後		2		○			1	1					オムニバス・共同(一部) オムニバス 兼1 オムニバス ※演習
		脳機能障害理学療法学特論Ⅱ	1後		2		○			1						
小計(6科目)		—	0	12	0		—	4	3	3	0	0		兼2		
心理学領域	a群	発達心理学特論	1前		2		○			1					兼1	
		認知心理学特論	1後		2		○									
		学習・行動分析学特論	1後		2		○			1						
	b群	組織心理学特論	1前		2		○								兼1	
		社会心理学特論	1後		2		○			1						
		社会調査特別演習	1後		2			○			1					
司法・犯罪心理学特論(司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開)	1後		2		○				1							
産業・労働心理学特論(産業・労働分野に関する理論と支援の展開)	1前		2		○			1					兼1	オムニバス		
小計(8科目)		—	0	16	0		—	4	2	0	0	0		兼3		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
専門領域科目	救急救命学領域	救急救護学特論	1前	2			○			2						オムニバス オムニバス・共同(一部) オムニバス ※演習 オムニバス ※演習	
		救急救護学特論演習	1後	2				○		2							
		災害・防災学特論	1後	2				○		2							
		救急救命システム特論	1後	2				○		2							
		小計(4科目)	—	0	8	0		—		3	0	0	0	0	0		兼0
	臨床心理士特修領域	a群	臨床心理学特論	1通	4			○			2	2					オムニバス 兼1 オムニバス 兼1 オムニバス オムニバス 共同 共同 共同
			臨床心理学面接特論Ⅰ(心理支援に関する理論と実践)	1前	2			○				1					
			臨床心理学面接特論Ⅱ	1後	2			○			1						
			臨床心理査定演習Ⅰ(心理的アセスメントに関する理論と実践)	1前	2				○		1	1					
			臨床心理査定演習Ⅱ	1前	2				○		1	1					
			臨床心理基礎実習	1通	2					○	2						
			心理実践実習Ⅰ	1通	4					○		5					
			臨床心理実習A(心理実践実習Ⅱ)	2通	6					○		5					
		b群	臨床心理実習B	2通	1					○		2					
			分析心理学特論	1後	2			○			1						兼1
	思春期臨床心理学特論(教育分野に関する理論と支援の展開)	1後	2			○											
		グループアプローチ特論(家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践)	1後	2			○		1								
	小計(12科目)	—	0	31	0		—		3	5	0	0	0	0	兼2		
研究演習	健康科学特別研究Ⅰ	1通	2					○		14	7	3					
	健康科学特別研究Ⅱ	2通	6					○		14	7	3					
	小計(2科目)	—	8	0	0		—		14	7	3	0	0	0	兼0		
合計(46科目)		—	14	89	0		—		15	9	3	0	0	0	兼12		
学位又は称号	修士(健康科学)	学位又は学科の分野				文学関係、保健衛生学関係(リハビリテーション関係)、保健衛生学関係(看護学関係及びリハビリテーション関係を除く。)											
卒業要件及び履修方法						授業期間等											
○理学療法コース：共通基礎科目から必修6単位、選択必修を「健康科学研究法特論Ⅰ」を含む12単位以上(ただし、心理学領域で4単位まで代替可能とする(演習科目を除く))、理学療法領域のa~c群いずれか1つの群から4単位、研究演習8単位、合計30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で論文の審査および最終試験(口頭試験)に合格すること ○臨床心理学コース：共通基礎科目から必修6単位、選択必修2単位以上、心理学領域a・b群から各2単位以上(演習科目を除く)、臨床心理士特修領域のa群から21単位以上、b群から2単位以上、研究演習8単位、合計43単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で論文の審査および最終試験(口頭試験)に合格すること ○心理学コース：共通基礎科目から必修6単位、選択必修8単位以上、心理学領域から8単位以上、研究演習8単位、合計30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で論文の審査および最終試験(口頭試験)に合格すること ○救急救命学コース：共通基礎科目から必修6単位、選択必修を「健康科学研究法特論Ⅰ」を含む10単位以上(ただし、心理学領域で4単位まで代替可能とする(演習科目を除く))、救急救命学領域の「救急救護学特論」「救急救護学特論演習」を含む6単位以上、研究演習8単位、合計30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で論文の審査および最終試験(口頭試験)に合格すること						1学年の学期区分			2期								
						1学期の授業期間			14週								
						1時限の授業時間			100分								

教 育 課 程 等 の 概 要															
(健康科学研究科 健康科学専攻 (博士後期課程))															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
共通科目	健康科学実践研究法特論	1前	1			○			1	1	1				オムニバス・共同 (一部) オムニバス オムニバス 兼3 オムニバス オムニバス
	Scientific English	1前		1			○		1	2					
	健康科学イノベーション特論	1前		1		○			3						
	医療マネジメント特論	1前		1		○									
	医学・健康教育特論	1前		1		○			1	2					
小計 (5科目)		—	1	4	0	—			6	3	1	0	0	兼3	
専門科目	健康生命科学領域	生体機能学特論演習	1後		2			○		1					兼1 オムニバス
		行動科学特論演習	1後		2			○		2					オムニバス
	健康・生活支援科学領域	健康回復支援科学特論演習A	1後		2			○		1	1				オムニバス
		健康回復支援科学特論演習B	1後		2			○			1	1			オムニバス
		健康回復支援科学特論演習C	1後		2			○		2					オムニバス
		健康・生活支援科学特論演習A	1後		2			○		1		1			オムニバス
		健康・生活支援科学特論演習B	1後		2			○			2				オムニバス
		健康・生活支援科学特論演習C	1後		2			○		2					オムニバス
小計 (8科目)		—	0	16	0	—			9	4	2	0	0	兼1	
研究指導	特別研究Ⅰ	1通	2				○		10	3	2				
	特別研究Ⅱ	2通	4				○		10	3	2				
	特別研究Ⅲ	3通	4				○		10	3	2				
	小計 (3科目)		—	10	0	0	—			10	3	2	0	0	兼0
合計 (16科目)		—	11	20	0	—			12	5	3	0	0	兼4	
学位又は称号	博士 (健康科学)	学位又は学科の分野			文学関係、保健衛生学関係 (リハビリテーション関係)、保健衛生学関係 (看護学関係及びリハビリテーション関係を除く。)										
卒業要件及び履修方法								授業期間等							
共通科目から「健康科学実践研究法特論」を含む2単位以上、専門科目から2単位以上、研究指導10単位、合計14単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で論文の審査および最終試験 (口頭試問) に合格すること								1学年の学期区分			2期				
								1学期の授業期間			14週				
								1時限の授業時間			100分				

授 業 科 目 の 概 要			
(健康科学研究科健康科学専攻（博士前期課程）)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通基礎科目	健康科学特論 I	<p>(概要) 健康科学専攻では、人間を生物心理社会的存在と捉え、心身の健康を守り、その向上と新しい生き方の創出を目的として、人間のこころとからだに多角的にアプローチする教育研究を行う。「健康科学特論」では、各分野の教員が共同して授業を担当し、健康科学に対する学生の基本的理解を促進し、研究への展望を広げていく。健康科学特論 I は、健康科学の基礎分野と位置づける脳科学について「脳を介して出会うこころとからだ」をテーマに展開する。授業では脳科学の講義の後に、それに関連した各分野の研究を持ち寄り、討論して交流し、今後の健康科学研究の可能性を探る。前半は脳の情動系・記憶系の講義を行った後に、それぞれの視点から情動系・記憶系に関連する理論や研究成果を紹介し、各分野の教員と学生とで討論して、今後の研究課題について展望する。後半は脳の高次機能についての講義と、その内容に関連する各分野からの理論や研究の紹介を行い、その後に教員と学生とで討論を行う。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(17 村田 伸/14回) 理学療法と心理学の両分野の研究を行っている村田が学生の理解と討論への積極的な参加を促すために全体のコーディネイトを担当する。授業の初回は、オリエンテーションとして、本学健康科学の概念、および授業テーマの概要と授業の展開方法について解説する。</p> <p>(6 坂本 敏郎/4回) 情動系・記憶系に関する脳科学の講義を行う。人間のこころと行動を深く理解するためには、進化生物学、比較心理学の視点から、人間と動物の行動を比較することが重要である。人と動物に共通する性分化、記憶、学習、情動、社会性に関わる脳内メカニズム、神経内分泌機構を概観することにより、人間のこころの健康について考察する。</p> <p>(6 坂本 敏郎・17 村田 伸・24 中野 英樹/3回) (共同) 坂本の講義を受け、教員からの問題提起および討論を行う。中野は、脳科学の知見を基盤とした人間のこころとからだに対するアプローチ (ニューロモジュレーション) の現状と課題について紹介する。村田は、理学療法の心理的効果判定に使用されることの多い、質問紙 (Profile of Mood States) や脳血流動態を指標にした気分・感情評価の現状と課題について紹介する。討論にあたって各教員は、自らの専門分野から発言を行い、活発な議論を促す。</p> <p>(5 兒玉 隆之/3回) 高次脳機能に関連する講義を行う。ヒトの脳機能において、取り巻く環境やヒトの表情は「情動 (辺縁系)」や「高次脳機能」へ大きな影響を及ぼす。脳機能障害者はこれらの脳内情報処理メカニズムが健常者と異なることから社会生活に不具合を生じることが多く、延いては健康にも問題を引き起こす。本講では神経生理学的にそれらのメカニズムについて考え、心身の神経科学的な仕組みを理解する。</p> <p>(5 兒玉 隆之・⑧ 宮崎 純弥・17 村田 伸・⑦ 岸 太一/3回) (共同) 兒玉の講義を受け、教員からの問題提起および討論を行う。宮崎は、運動器障害を「認知と注意」の視点から捉え、運動機能改善に必要な高次脳機能について問題提起し学生と討論する。岸は、神経科学と心理学の統合である神経認知的アプローチを取り上げ、精神疾患を対象とした臨床的応用について問題提起を行い、学生と討論する。討論にあたって各教員は、自らの専門分野から発言を行い、活発な議論を促す。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	健康科学特論Ⅱ	<p>(概要) 健康科学専攻では、人間を生物心理社会的存在と捉え、心身の健康を守り、その向上と新しい生き方の創出を目的として、人間のこころとからだに多角的にアプローチする教育研究を行う。「健康科学特論」では、各分野の教員が共同して授業を担当し、健康科学に対する学生の基本的理解を促進し、研究への展望を広げていく。健康科学特論Ⅱでは、本専攻の研究目的に関連して「健康の維持・向上と新しい生き方への支援」をテーマに展開する。授業では健康課題とその対策に関する講義の後に、それに関連した各分野の研究を持ち寄り、討論して交流し、健康科学研究の実践的な課題について考察する。前半は「ストレス対処と健康な生活」の講義を行った後に、それぞれの視点から理論や研究成果を紹介し、各分野の教員と学生とで討論して、今後の研究課題について展望する。後半は「高齢者・障害者の健康と生きがい支援」についての講義と、その内容に関連する各分野からの理論や研究の紹介を行い、その後教員と学生とで討論する。</p> <p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(17 村田 伸／14回) 理学療法と心理学の両分野の研究を行っている村田が学生の理解と討論への積極的な参加を促すために全体のコーディネイトを担当する。授業の初回は、オリエンテーションとして、本学健康科学の研究目的、および授業テーマの概要と授業の展開方法について解説する。</p> <p>(23 田中 芳幸／4回) ストレス対処と健康な生活について、健康科学に関連する近年の研究成果も含めつつ講義する。ストレスや健康については従来の単一の学問領域に限らず学際的な研究が展開されていることを理解するとともに、生物心理社会的な視点を持って人々のストレスや健康への支援を行う重要性についても論考する。また、特に身体的・行動的な側面を中心とした健康関連行動とストレス、および一般的な健康状態との関連性のメカニズムについて検討する。</p> <p>(⑩ 白岩 加代子・11 中西 龍一・17 村田 伸・23 田中 芳幸／3回) (共同) 田中の講義を受け、教員からの問題提起および討論を行う。白岩は、理学療法の視点から、運動が及ぼす影響について性差に着目し、女性の運動習慣者の増加に対する対応策について議論する。中西は、さまざまな心理療法のなかでも、人間性心理学に属し体と心のつながり、すなわちホリスティックな視点をとるゲシュタルト療法について紹介する。討論にあたって各教員は、自らの専門分野から発言を行い、活発な議論を促す。</p> <p>(17 村田 伸／3回) 高齢者や障害者の健康と生きがいを支援するための方略について、実践を踏まえて講義する。まず、高齢者や障害者の身体・認知・心理機能の特徴を理解し、高齢者・障害者に起こりやすい生活上の問題点を整理する。さらに、高齢者に効果的な健康支援法や生きがい対策について講義し、障害別(内部障害・運動器障害・脳機能障害)に効果的な健康支援対策を紹介する。</p> <p>(② 関根 和弘・14 堀江 淳・17 村田 伸／3回) (共同) 村田の講義を受け、教員からの問題提起および討論を行う。堀江は、健康づくりの最重要課題といえる禁煙と、それを実現させるための行動変容について、生活習慣病に起因する障害と精神、心理状態の関係性に視点を当てて議論する。関根は、日常生活における高齢者や障がい者らの転倒などの事故事例を提示し、予防と対策について議論する。討論にあたって各教員は、自らの専門分野から発言を行い、活発な議論を促す。</p>	オムニバス方式・共同(一部)
	研究倫理学特論	<p>(概要) 少子高齢化、核家族化、個人主義など多様な価値観によって、小児から成人、高齢者に至るまで、あらゆる世代の心身に関する健康的、社会的倫理問題が表在化している。高度専門職業人は、これら諸問題を理解した上で、新たな価値を創出するための行動が求められる。本特論では、健康科学分野における倫理の諸問題について、生命倫理、および研究倫理の観点から理解を深め、高度専門職業人、研究者としての倫理的自覚を修得する。</p> <p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(⑫ 梶谷 佳子／7回) 生命倫理の視点から、倫理の基礎、社会的状況から研究に至るまでの幅広い倫理に関する知識を教授する。</p> <p>(28 伊藤 健一／7回) 研究倫理の視点から、倫理の基礎、社会的状況から研究に至るまでの幅広い倫理に関する知識を教授する。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	健康科学研究法特論Ⅰ	<p>(概要) 科学としての健康科学を実践するためには、より具体的な研究法の構築が必要とされる。本特論では、研究の必要性、倫理問題の考え方からデータ分析、成果の公表まで、研究の着想からの一連の流れを教授する。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(14 堀江 淳/7回) 記述統計、パラメトリックとノンパラメトリック、t検定、χ^2検定、相関、回帰分析、重回帰分析、分散分析など具体的なデータ解析の方法を学習する。また、学会発表、論文投稿時のデータ標記の方法などについても合わせて学習する。</p> <p>(⑥ 甲斐 義浩/7回) 研究法の総論として、研究の概論、倫理問題(倫理委員会提出資料の作成など含む)、文献レビュー、研究テーマの立案、研究デザイン構築、学会発表、論文投稿の仕方などを学習する。</p>	オムニバス方式
	健康科学研究法特論Ⅱ	<p>心理学分野におけるフィールドワーク・参与観察・インタビューなどを用いた「質的研究」について、その方法論と具体的な手続きを理解することが、この授業の目的である。心理学では量的研究(実験室調査などを含む)が主として採用されてきたが、近年では質的研究も一般的な手法として知られてきた。質的研究では、日常生活のさまざまな場面(フィールド)で生じる人の行動や心の動きについて、その場面の中で現実と密着しつつ解明しようと試みる。この授業では、前半は講義形式で質的心理学研究について概説する。後半は演習形式で質的心理学研究の論文講読、発表、討議とそこで用いられた方法に関する演習を通して、対象となるフィールドおよびそこで生じる心理現象と、適切な質的研究方法の選択について検討する。</p>	講義17時間 演習13時間
	心理統計学特論	<p>本講では、心理学研究においてよく用いられる種々のデータ解析法について理解を深めるとともに、統計ソフト(SPSS, AMOS)を実際に使用して、結果を読み取り適切にまとめるという演習形式も取り入れて展開していく。具体的には、因子分析、重回帰分析、パス解析、構造方程式モデリング、マルチレベル分析等を取り上げる。上記の解析方法における実際の研究での適用例や留意点についても議論することで、各自の研究に応用できる実践的な力を養成していく。</p>	講義20時間 演習10時間
	脳科学特論	<p>(概要) 脳は、あらゆる環境のなかで絶え間なく活動し続ける。本特論では、基礎として動物の行動を規定するものを遺伝、環境、経験等、幅広くとらえ、その枠組みのなかで、神経伝達物質および脳内ホルモンと行動との関係について概観する。感覚、学習、情動、動機づけ、社会的行動等、基礎心理学で取り扱うテーマの神経生物学的基盤を理解する。また、ヒトにおける神経科学の基本的概念を教授し、神経科学を基盤とした「脳機能」を理解するための研究成果とその手法について幅広く学ぶことを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(6 坂本 敏郎/5回) 脳のはたらきを理解するために、神経系および神経内分泌系全体を概観する。中枢神経系から末梢神経に至るまで、神経系の伝達にはイオン、神経伝達物質、受容体が重要な役割を果たしている。知覚、動機づけに関わる脳内機構を概観することにより、こころの源泉となる脳のはたらきについて探究する。</p> <p>(① 久保山 一敏/4回) 生命危機に直結する二次的脳損傷の代表として頭蓋内圧亢進や脳ヘルニアがあり、その終末像が脳死である。そのメカニズムは古くから解明が試みられてきたが、今なお臨床的に克服されたとはいえない。改めてこれらの病態を振り返り、今後の治療の可能性を探る。</p> <p>(5 兒玉 隆之/5回) これまでの研究報告から、脳は成熟後もさまざまな「学習」を通じて変化を起し続けることが明らかとなっており、このことは脳の機能が「経験」に大きく依存していることを意味する。本特論は、これまで明らかとなっている脳の局在機能およびその発現機構について学び、近年の脳機能に関する研究成果を交えながら深くとらえ理解することを目標とする。</p>	オムニバス方式
	健康心理学特論(心の健康教育に関する理論と実践)	<p>心理的支援を提供する上で必要とされている能力の一つである、心の健康教育に関する企画や運営・実践に関する能力の習得を本科目の目的とする。目的を達成するために、心の健康教育に関する諸理論を学び、知識の統合を図った後に、心の健康教育の実践に関する論文を批判的に論考することで、実践能力の向上を図る。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	精神医学特論（保健医療分野に関する理論と支援の展開）	<p>（概要）代表的な精神疾患について、実際の症例をあげて紹介し、診断のみならず、精神科治療の実際について基本的な流れを解説する。また、障害の成り立ちから社会的支援の方法まで、具体例を示しながら教授する。</p> <p>（オムニバス方式／14回）</p> <p>（15）吉田 卓史／6回）実際の症例をあげ、統合失調症、気分障害をはじめとする代表的な精神疾患の症状・経過・診断・治療について専門的な医学的な知識がなくとも理解できるよう解説する。また、精神医学の最近のトピックについても紹介する。</p> <p>（14）松本 賢哉／4回）実際の症例をあげ、統合失調症、気分障害をはじめとする代表的な精神疾患の症状による社会生活での障害生活のしにくさについて解説する。</p> <p>（13）佐川 佳南枝／4回）わが国の精神保健医療福祉の流れとリハビリテーションの理念、リハビリテーションにおける支援の視点や支援方法、地域生活支援と連携、社会復帰に向けた支援について最近増えてきた司法領域での支援も含めて紹介する。</p>	オムニバス方式
	救急医学特論	<p>（概要）救急医学とそれをめぐる課題、臨床的問題等を取り上げる。講義では、救急医学における一般的知識（循環器疾患、脳血管障害、消化器疾患、外傷、中毒、環境障害、災害医療など）を教授するとともに、その根拠となった、解剖学、病態生理学などについて概説する。さらに、急変につながるような病態についても概説する。</p> <p>（オムニバス方式／14回）</p> <p>（3）西本 泰久／7回）救急医学における診療の基礎となった解剖学、病態生理学について教授する。特に、心臓、大血管疾患、呼吸器疾患を中心に心停止に至るような病態に関して、心停止に至る前の早期の判断などを中心に解説する。</p> <p>（1）久保山 一敏／7回）脳・神経や消化器などの急性疾患、外傷、急性中毒、さまざまな環境障害など、生命や機能を危機的状態に陥れる病態についての理解を深める。また、脳死や終末期における救急医学の現状についても解説する。</p>	オムニバス方式
	精神薬理学特論	<p>薬物療法を理解するためには、疾患の病態、適切な治療薬、それらの治療薬がなぜ効果を示すかを学ぶことが必要である。本講義では、薬理学の基礎的知識を学んだ後、様々な中枢・精神疾患の病態とこれら疾患に対する薬物療法を概説する。具体的には、抗鬱薬、抗不安薬、精神安定薬、鎮静薬、睡眠薬、睡眠導入薬、定型・非定型抗精神病薬、抗パーキンソン病薬、抗アルツハイマー病薬および抗癲癇薬などの作用機序に加えて、これら薬剤の副作用や有害性も教授する。</p>	
	生活支援学特論	<p>（概要）地域の概念を理解し、地域における障害者、高齢者の国際生活機能分類、ノーマライゼーション、自立生活などについて学ぶ。さらに、地域社会で生活する障害者や高齢者を含むすべての人が、自立した生活を送るために必要な支援について考える。</p> <p>（オムニバス形式／全14回）</p> <p>（17）村田 伸／7回）高齢者が抱えるさまざまな社会的問題を概観し、地域高齢者の身体・認知・精神心理機能の特徴から、どのような生活支援が必要なのかを議論する。</p> <p>（10）白岩 加代子／7回）地域社会において健康で自立した生活を営むために必要となる対処法について考え、生活習慣病の予防法や地域住民主体型の健康増進法などについて検討する。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
	運動機能学特論	<p>(概要) 運動機能制御に関わるメカニズムを理解するとともに、機能・活動障害との関連性を学修する。</p> <p>(オムニバス形式/全14回)</p> <p>(⑩ 横山 茂樹/7回) 運動感覚の特性について理解を深めるとともに、立位や歩行動作といった姿勢・基本動作に関わる制御機構について論考する。</p> <p>(7 崎田 正博/7回) 高齢者の社会的問題となっているバランス機能の悪化(転倒)や生活習慣病に着目し、その要因である心理的・社会的・身体的側面から高齢者の転倒や生活習慣病発症を教授する。また、高齢者の転倒に対する改善策として、効果的とされる先行研究等を踏まえながら、運動機能制御のメカニズムを実証する手段を検討する。</p>	オムニバス方式	
	発達障害特論(福祉分野に関する理論と支援の展開)	<p>(概要) 乳幼児から高齢者におけるさまざまな障害について、医学的診断、生物-心理-社会モデルに基づくアセスメントについて講義ならびに文献抄読により学び、福祉分野における多職種が連携して行う包括的心理支援について理解を深め、臨床場面における実践力を習得する。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(⑤ 大久保 千恵/9回) 障害児・者支援に関わる基本的な理論や法規を概観したうえで、乳幼児から成人までの発達障害、虐待問題についての理解を深め、専門機関・学校・地域・家族などを包括した福祉分野における心理的支援の実践について講義する。</p> <p>(⑦ 岸 太一/5回) 成人の外傷・脳血管障害、高齢者の認知症、高齢者虐待に関するアセスメントと福祉分野における支援について臨床例を交えながら講義する。最近活発になってきている障害者の就労支援についても教授する。</p>	オムニバス方式	
専門領域科目	理学療法領域 a群	生活機能障害理学療法学特論 I	<p>(概要) 高齢者に特有の疾患は多く、特に、高齢者であるがゆえに配慮すべき評価、治療、支援がある。高齢者の生活機能についての理解を深め、実践的、専門的知識、技術を有した職業人育成をめざした講義内容とする。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(14 堀江 淳/7回) 高齢者特有に見られる疾患、特に、呼吸器疾患、循環器疾患など内部障害に特化し、理解を深める。さらに、その予備軍に対する早期発見、早期治療の導入に必要な評価、生活機能に着目したアプローチ方法などについて学修する。</p> <p>(⑩ 白岩 加代子/6回) 高齢者特有に見られる身体機能、精神、心理機能についての理解を深めるとともに、その評価、検査法を学ぶ。さらに、高齢者の転倒予防に対する具体的なアプローチ方法について検討する。</p> <p>(14 堀江 淳・⑩ 白岩 加代子/1回)(共同)本特論のまとめを行うとともに、学生と授業内容や生活機能障害理学療法学に関わる研究テーマ設定について質疑応答や討論を行う。</p>	オムニバス方式・共同(一部) 講義 21時間 演習 9時間
		生活機能障害理学療法学特論 II	<p>(概要) 地域在住の生活機能障害者の理学療法を展開する上で生活支援に関わる理学療法士が果たすべき役割について理解を深め、在宅障害者のADLとQOLの向上を推進するためのリーダーとして活躍できるような実践的能力の基礎理論を習得し、それらの評価方法・解析方法・アプローチ方法を学修する。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(7 崎田 正博/5回) 生活機能障害者の生活活動を理学療法士の視点からADLに直結する動作を演習を交えて概論・解析し、解析上の視点と問題点の抽出を学修する。</p> <p>(⑩ 白岩 加代子/5回) 生活機能障害を有する人々の障害予防や健康維持・向上について考える。また、自立した生活を送るために必要な環境整備や在宅障害者に必要となる支援方法などについて学修する。</p> <p>(31 山野 薫/4回) 生活機能障害者や高齢者に必要となる屋内・屋外環境における活動や動作改善に向けた介入方法について生活支援に着目し、演習を交えて学修する。</p>	オムニバス方式 講義 21時間 演習 9時間

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
b 群	運動器障害理学療法学特論Ⅰ	<p>(概要) 本特論では、①運動器障害に伴う異常姿勢や運動連鎖の特性を解明し、②運動器障害に対する評価方法と解析およびその治療法の検証について理解を深めることを主眼とする。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(⑩ 横山 茂樹/7回) 運動器機能障害によって生じる異常な姿勢や運動連鎖に関する発生メカニズムの捉え方について学修する。さらには、運動器機能障害の評価指標とその測定法および解析・解釈と治療法について議論する。</p> <p>(⑨ 安彦 鉄平/6回) 脊椎の運動器機能障害によって生じる異常姿勢や運動連鎖の特性、メカニズムなどについて学修する。さらに、エビデンスに基づいた脊椎疾患の評価方法と治療法について学ぶことを目標とする。</p> <p>(⑩ 横山 茂樹・⑨ 安彦 鉄平/1回) (共同) 本特論のまとめを行うとともに、学生と授業内容や運動器障害理学療法学に関わる研究テーマ設定について質疑応答や討論を行う。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)
	運動器障害理学療法学特論Ⅱ	<p>(概要) 本特論では、運動器機能障害について定量的な評価方法と解析手法を学び、その障害の正しい理学療法について理解を深めることを主眼とする。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(⑧ 宮崎 純弥/7回) 体幹(脊柱を中心)の運動器障害を中心に、定量的評価法を演習として行い、その結果の解析方法と結果の解釈について説明し、代表的な疾患の理学療法について学修する。</p> <p>(⑥ 甲斐 義浩/6回) 四肢の運動器疾患に対する理学療法の評価と治療の具体的方略について議論する。さらに、四肢運動機能やその障害に関する研究の動向を分析し、その研究手法について多角的に学ぶことを目標とする。</p> <p>(⑧ 宮崎 純弥・⑥ 甲斐 義浩/1回) (共同) 本特論のまとめを行う。また、学生が行ったプレゼンテーションに対して教員が講評を行うとともに、学生を含めて討論する。</p>	オムニバス方式・共同 (一部) 講義 23時間 演習 7時間
c 群	脳機能障害理学療法学特論Ⅰ	<p>(概要) 脳の認知機能について、その基礎となる神経情報処理システム、注意および記憶の仕組みなどについて概説し、それらの評価方法および解析方法について理解する。さらに、それらが障害されることで引き起こされる病態(認知症、高次脳機能障害など)に対する理学療法アプローチとしての介入方法を発展的に考え理解を深める。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(5 兒玉 隆之/7回) ヒトが安定した日常生活・社会生活を送るためには、必要な情報を集めて、判断・計画し、記憶する脳の力(機能)が必要である。このような脳機能を認知機能という。認知機能が障害されると認知症や高次脳機能障害が生じる。このような障害に対する理学療法を考える上では、認知機能の仕組みや特性を総合的に理解することが重要となる。本特論では、認知機能に関わる脳神経機構について、サルやヒトを対象とした神経生理学研究成果を中心に学び、障害をとらえるための機能解析の考え方を身につけ、介入方法を探索する。</p> <p>(24 中野 英樹/6回) 人間の健康ならびに心身機能の維持・向上のためには脳機能の理解が必要不可欠である。ここでは、人間のこころとからだに関わる脳の構造と機能、脳機能が障害されることにより生じる身体・認知・精神心理機能への影響、脳科学的手法を用いた身体・認知・精神心理機能の可視化と制御について具体的な例を挙げながら講義する。また、脳卒中・認知症・神経難病・高次脳機能障害などの脳機能疾患等に対する具体的な評価・アプローチ方法についても教授する。</p> <p>(5 兒玉 隆之・24 中野 英樹/1回) (共同) 本特論のまとめを行うとともに、学生と授業内容や脳機能障害理学療法学に関わる研究テーマ設定について質疑応答や討論を行う。</p>	オムニバス方式・共同 (一部) 講義 21時間 演習 9時間

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	脳機能障害理学療法学特論Ⅱ	<p>(概要) 脳の感覚運動機能について、本機能の障害を代表的徴候とする脳血管障害やパーキンソン病などの身体障害の脳機能メカニズムを学び、それらの評価方法および解析方法について理解する。さらに、それらが障害されることで引き起こされる基本動作や日常生活に生じる問題に対して、理学療法アプローチとしての介入方法の理解を深める。</p> <p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(17 村田 伸／8回) 脳血管障害やパーキンソン病による身体障害の特徴とその評価方法について概説し、グループワーク形式を取り入れながら学修する。また、最終回に本特論のまとめを行い、討論を行う。</p> <p>(32 弓岡 光徳／6回) 脳血管障害やパーキンソン病による身体障害が生じるメカニズムを理解し、機能障害に対する介入方法としての理学療法テクニックについて学修する。</p>	<p>オムニバス方式</p> <p>講義 21時間 演習 9時間</p>
心理学領域	a群 発達心理学特論	発達心理学の基礎理論に関して、その歴史的展開を理解し、現代的な意義および臨床的な応用可能性について検討することを目的とする。邦文および英文の基本文献を講読し、発表、討議を行う。基本概念等については適宜講義を行う。これらを通して、発達心理学における基本問題について概観し、基本的な発達心理学的視点について学ぶ。また各発達理論の特徴と問題点、およびそれらの発達理論の統合の可能性を探っていく。その上で状況に応じた適切な発達支援の方法について考える。	
	認知心理学特論	認知心理学では、人間をコンピュータのような情報処理システムであるとみなし、人間の知的行動の特徴を明らかにしようとしている。ここでいう知的行動とは、自分の周囲のさまざまな世界を知る、わかる、ことを指している。本特論では、特に普段われわれが特別に意識することなく行っている言語情報処理や記憶の過程を中心に、その心理的メカニズムを理解する。またこうしたトピックに関する講義や体験を通して、認知心理学を実践的に学ぶ。	
	学習・行動分析学特論	本特論では、学習心理学の理論と臨床場面への応用についての理解を深めることを目的とする。学習は経験による行動の永続的な変化である。動物の行動が経験によってどのように形成され、変容するかについての理論を取り扱う。具体的には、「レスポデント条件づけ」「オペラント条件づけ」「観察学習」等の諸理論を、具体的な実験を紹介しながら解説する。これらの理論の理解を基盤に、家庭、教育、医療現場におけるさまざまな問題の解決に対する行動分析学の考え方および思想の理解をめざす。	
b群	組織心理学特論	組織心理学は組織の中で働く人間の行動の特徴やその背後にある心理過程を明らかにし、組織における人間の行動・心理上の諸問題への対処を考えるフレームワークを与える学問分野である。ワーク・モチベーション、意思決定、組織ストレス、キャリア、人間関係とコミュニケーション、チームワーク、リーダーシップなどが代表的な研究テーマである。この授業では心理学の応用という視点から、組織における問題解決につながる具体的な研究事例に焦点を当てて議論していく。	
	社会心理学特論	社会心理学は「社会的存在」としての人間の心理と行動について「個人内過程」「対人行動」「集団」「社会」を個別テーマとして理解するための研究分野であるが、「社会心理学的なものの方」やそれを具現化するための方法論(社会心理学的方法論)を理解し身につけることを目的として研究事例を取り上げて検討を行う。このことは学問的興味のみならず、人々が公正中立な立場で他者を理解し、偏見のない社会をつくりあげていくために必要といえる。基礎的研究だけではなく、企業活動や環境保護など社会的問題の解決を目的とした応用研究も視野に置いて学習をする。	
	社会調査特別演習	本科目では、社会心理学に関するテーマについて、これまで身につけた知識や研究方法を応用して実証研究を行う。具体的には、国内外のさまざまな先行研究をもとに仮説構築を行い、それを検証するための適切な方法を立案する。その後、収集されたデータの解析を行い、論考を加え、最終的には論文の形式にまとめる。こうした一連のプロセスを経験することによって、修士論文で活用すべき実践的なスキルを習得していく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	司法・犯罪心理学特論（司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開）	犯罪および非行を理解するために、それを取り巻く心理職の仕事や制度、組織体制について実践的知識を得る。また、犯罪・非行に関する心理学諸理論を理解した上で、その矯正を目指すための臨床心理学的なアプローチを幅広く理解し、その基礎的技術を体得する。	
	産業・労働心理学特論（産業・労働分野に関する理論と支援の展開）	<p>（概要）本講義では、産業・労働の現場におけるメンタルヘルスケアを中心に、人間らしく働くためにはどうすればよいか、避けがたいストレスに対してどのように対処していけばよいかなど、すなわち職場での心身のストレスとその対処法（ストレス・コーピング）について理論と症例から学ぶ。</p> <p>（オムニバス方式／全14回）</p> <p>（11 中西 龍一／7回）ストレスとそれに対する人体の反応について学んだ後、認知療法、アサーショントレーニング、ソーシャル・スキル・トレーニングを体験をまじえて学び、最終回は架空の事例について検討を加える。</p> <p>（35 菅 佐和子／7回）職場における様々なストレスを理解し、心理的支援の方法を具体的に学ぶ。また、その際に不可欠な職場内での連携、職場外との連携および各種ハラスメントについて理解を深める。</p>	オムニバス方式
救急救命学領域	救急救護学特論	<p>（概要）病院前救護（プレホスピタル・ケア）活動における医学的課題、および救急現場でのマネジメント課題の2つを取り上げ、この両面から「救急救護学」の概念を知り、「救急救護学特論演習」につなげる。授業では、まず救急救護活動における具体的な症例、特に重篤な症例を取り上げ、その課題を抽出・分析し、対処法などについて考察する。また、併せて、救急救護活動における人権や倫理的問題および法的な問題、心理社会的な問題、コミュニケーションの問題への理解を通じて、組織的・管理的課題や医療機関との連携課題などについて考え、その対処法などを検討する。</p> <p>（オムニバス方式／全14回）</p> <p>③ 西本 泰久／10回）救急救護の医学的課題として、症候別（意識障害、頭痛、胸痛、呼吸困難、腹痛、腰痛、背部痛、発熱など）、系統別（循環器疾患、脳血管障害、消化器疾患、運動器疾患、外傷、中毒、環境障害など）に重篤な病態を中心に、それぞれの特徴的な診断法、対処法、注意点に関して検討する。</p> <p>④ 平出 敦／4回）救急救護のマネジメント課題として、人権や倫理および法的問題、心的外傷後ストレス障害（PTSD）、DV、小児虐待、自傷行為などの心理社会的問題、コミュニケーションの問題への理解を通じて、救急救護現場特有の管理方法や搬送、医療機関との連携について考える。</p>	オムニバス方式
	救急救護学特論演習	<p>（概要）病院前救護（プレホスピタル・ケア）活動における医学的課題および救急現場でのコミュニケーション課題の2つを取り上げ、この両面から、演習を通じて「救急救護学」を考える。授業では、まず救急救護活動における具体的な症例、特に重篤な症例を取り上げ、その課題を抽出・分析し、対処法などについて、演習を通じて修得する。また、後半では、救急現場活動における組織的・管理的課題や、医療機関、傷病者およびその家族とのコミュニケーションの問題を取り上げ、具体的な事例について、その対処法などをディスカッションやシミュレーションなどの演習を通じて修得する。</p> <p>（オムニバス方式／全14回）</p> <p>① 久保山 一敏／6回）系統別の循環器疾患、呼吸器疾患、脳血管障害、消化器疾患、運動器疾患、外傷、中毒、環境障害等の特徴的な症状の観察、処置、注意点に関して救急現場の視点から演習を通じて修得する。また感染症対策や医療事故などや病院・医師、コメディカルとのコミュニケーションを演習を通じて修得する。</p> <p>② 関根 和弘／7回）症候別の意識障害、頭痛、胸痛、呼吸困難、腹痛、腰痛・背部痛、発熱等の特徴的な症状の観察、処置、注意点に関して救急救命現場の視点から演習を通じて修得する。さらに病院救急救命士やドクターカースタッフや年齢や対象の異なる傷病者、傷病者家族とのコミュニケーション、また行政機関、所属組織内でのコミュニケーションを演習を通じて修得する。</p> <p>① 久保山 一敏・② 関根 和弘／1回）（共同）救急現場におけるコミュニケーションの机上・図上トレーニングとディスカッションを行う。</p>	オムニバス方式・共同（一部）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	災害・防災学特論	<p>(概要) 災害は自然災害から人為災害・テロリズムと多岐にわたり、対象人数も数人の救急事案から数万人の広域災害まで幅広い。災害医学・防災学もその諸相に対応するため多様にならざるを得ないが、その中でも共通する原理原則は存在する。本科目では特に被災者の健康につながる課題を主軸に演習も交えながら概説する。</p> <p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(① 久保山 一敏／7回) 被災者の健康被害としては、大地震の急性期では外傷が想起され、亜急性期～慢性期には感染症や慢性疾患、精神疾患が対象となる。いっぽうNBCなどの特殊災害では、それぞれに特有の症候、検査、治療が存在する。各種・各フェーズの災害における医学的課題を、それぞれ解説する。</p> <p>(② 関根 和弘／7回) 災害現場や外傷、多数傷病者事故における救急救命士の役割や消防組織の活動方法など、プレホスピタルケアを中心としたマネジメント対応や国際救助の在り方に関して教授する。</p>	<p>オムニバス方式</p> <p>講義 18時間 演習 12時間</p>
	救急救命システム特論	<p>(概要) 救急救命事案における通報から司令、出動、現場活動、病院搬送までの救急救命システム、救急救命士や救急隊員の指示・指導や検証のシステムに関して、実際の現場に即して指示・指導、助言、検証が行えるように、知識と技能、コミュニケーション能力を、演習を交えて身につける。</p> <p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(③ 西本 泰久／7回) 救急現場における包括的指示、具体的指示、メディカルコントロール態勢について、メディカルコントロールを行う医師の立場から指示・指導、助言、検証に関して教授する。</p> <p>(④ 関根 和弘／7回) ウツタイン様式などの蘇生データや外傷データから病院前救急医学の課題を明らかにし、救急救命士の視点から救急救命システムの問題点や改善点について考察する。</p>	<p>オムニバス方式</p> <p>講義 21時間 演習 9時間</p>
臨床心理士特修領域	臨床心理学特論	<p>(概要) 広く臨床心理学すなわち精神力動モデル、認知行動モデル、人間性心理学モデルを概観し、担当教員それぞれの理論的背景に基づいた心理臨床学的実践論・技法論を展開する。イメージ療法、ゲシュタルト療法、精神分析的な精神療法、分析心理学に基づく心理療法など幅広い臨床心理学的理論・技法論を教授する。</p> <p>(オムニバス方式／全28回)</p> <p>(11 中西 龍一／7回) Frederick Perls により提唱されたGestalt therapyを中心に、人間性心理学に属するカウンセリング諸理論について学び、その技法や実践を体験的に修得する。</p> <p>(15 松下 幸治／7回) C.G. Jungが提唱した分析心理学に基づき、その理論的背景を概観し、元型 (archetype)、個人神話 (personal myth)、布置 (constellation)、タブラ・ラサ (tabula rasa)、全体性 (wholeness, totality) などのキー・ワードをもとに、心理臨床的実践論を修得する。</p> <p>(⑦ 岸 太一／7回) 心理的不適応や行動上の問題を学習理論をベースに捉える認知行動療法について学ぶ。認知行動療法のキーとなる諸理論や基本的手法、プロセスを理解し、認知行動療法に基づいた支援を行う上での実践能力の習得を目的とする。</p> <p>(22 ジェイムス 朋子／7回) 自我心理学の立場から精神分析的な心理療法の基本的諸技法を修得することを目的とする。特に、精神分析の諸概念と治療機序を理解し、精神分析的なもののとらえ方、考え方を学ぶ。</p>	<p>オムニバス方式</p>
	臨床心理学面接特論 I (心理支援に関する理論と実践)	<p>主要な各学派やアプローチに基づく各面接法の特徴についての基本的知識を習得し、心理面接の基本的な姿勢と技法について概略を理解する。その上で、前半にはプレイ・セラピーの基本技法を、後半にはクライエントにとって最初の心理療法体験の場となるインテーク面接の全プロセス、および、心理療法面接の初期過程についての基本技法を、ロールプレイや事例検討を通じて実践力のあるものとして体得する。</p>	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	臨床心理学面接特論Ⅱ	臨床心理学的諸理論に基づき、より実践的な面接技法を教授する。理論的背景によってはさまざまな面接技法が存在するが、そのそれぞれに精通するエッセンスについて学び、具体的な面接技法を修得する。ロール・プレイによって、実際にカウンセラー体験およびクライアント体験を通して実践の場で治療的に活かせる面接技法を体得する。主として人間性心理学に基づくイメージ面接技法を修得し、フリー・イメージ法体的な導入法を経験した上で、さまざまな指定イメージ法の実践的活用を体得する。イメージ面接技法のロール・プレイを通して、イメージ体験様式にみられる内的プロセスを体験的に実感するとともに「心理面接の繊細さ」を理解する。	
	臨床心理査定演習Ⅰ(心理的アセスメントに関する理論と実践)	<p>(概要) 臨床心理学的支援等の心理に関する支援を実践するために必要となる査定について、まず総論として理論モデル・査定の倫理・関係性査定・心理機能水準等の講義を行う。次に代表的な技法である心理検査法を実際的に学び修得し、心理学的支援および臨床心理の専門家に求められるアセスメント能力を養成する。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(23 田中 芳幸/5回) 総論的講義を行い、臨床心理行為等の心理に関する支援全般における査定の役割や意義を理解させる。また質問紙法の検査について、その作成法や信頼性・妥当性の検証法を指導するとともに、代表的な検査を取り上げながらその選択方法から報告の仕方までを教授する。</p> <p>(36 岩知道 志郎/4回) 作業検査法による査定を行う際の留意点を具体的に指導するとともに、代表的な知能検査と発達検査を取りあげてその特色や実施法を教授する。また、いくつかの作業検査については、心理学的支援の実践場面で活用できる技術の修得を目指す。</p> <p>(3 菅野 信夫/5回) 投影法としてよく使われる代表的な検査をいくつか取りあげ、それぞれの特徴と実践場面での選択と適応について学習していく。特に実施法については実際に施行し、技術の習熟を目指す。</p>	オムニバス方式
	臨床心理査定演習Ⅱ	<p>(概要) 臨床心理査定における基本姿勢に関する省察と代表的な心理検査の運用技術について、演習を通じて学修を深める。授業内では質問紙法、作業検査法、投影法のそれぞれから代表的な心理検査を複数取り上げ、その理論的背景・実施法・結果の集計処理法・結果の解釈と報告書の作成などを、実際的に訓練する。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(23 田中 芳幸/5回) 臨床心理査定を行う者の有り様が与える被査定者と査定結果への影響性の大きさについて、事例検討や演習を通じて実感を伴いながら学習できるように指導する。また、MMPIなど質問紙法による心理検査の実施に関する演習を行いつつ、臨床心理査定と臨床心理面接との円環的な関係性についても理解を深める。</p> <p>(36 岩知道 志郎/4回) 各種検査法の中で作業検査は、特に施行手順や器具の扱いによる被検者への負担を考慮すべきものである。WISCやK式発達検査などの実際の作業検査を取りあげながら検査者・被検者双方の体験的な教育を行い、負担感少なくスムーズに検査を施行できるように指導する。また事例検討も行いながら、発達相談への知能検査や発達検査の適用についても教授する。</p> <p>(3 菅野 信夫/5回) 投影法では、検査者・被検者関係が及ぼす査定結果への影響が特に大きいと言われている。まず両者の関連について検討し、そのうえで描画法(バウムテスト・風景構成法)とロールシャッハテストを取りあげ、実施法や結果の解釈について具体的に検討を行っていく。また報告書の作成で留意すべき点についても、事例を参考にしながら学習していく。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	臨床心理基礎実習	<p>(概要) 臨床心理業務に携わるために必要な査定を含む基本的なスキルや基本的感性をロールプレイや種々の訓練を通して体験的に学ぶ。グループワークの実習形式で行われ、学生個々の感受性を啓発すべくさまざまなワークを導入し、自身の傾向を知るとともに臨床心理専門家としての基本的姿勢を体得する。また、心理臨床センターでのインテークの陪席、インテークカンファレンス、ケースカンファレンスへの参加により多くの事例に接する。学外においては医療・司法の現場を見学し、種々の臨床現場のありようを学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式／全56回)</p> <p>(11 中西 龍一／28回) どのような臨床心理学の学派であれ、臨床家の仕事は、クライアントの話しに真摯に耳を傾けることから始まる。ここでは、心理療法の基礎となる傾聴技法をロールプレイによる実習形式で徹底的に体得するとともに、インテーク面接やコンサルテーションについてもロールプレイによる実習を行う。グループについては、構成的グループエンカウンターやゲシュタルトグループワーク、SSTのなかで、専門家を志す学生の自己の気づきを高める。また、医療・司法の学外施設で、心理臨床の実際を見学する実習も行う。</p> <p>(15 松下 幸治／28回) 臨床心理専門家としての「臨床心理行為」が真に被援助者の「お役に立つ」ことを体験的に理解すると同時に、それと同等かそれ以上に「臨床心理行為」のもつ「有害性」「副作用」について考える。またグループ・ワーク形式で、trust walkなどの感受性訓練に加え、心理査定体験学習を行い、学生個々が自己援助的内省を活性化できるような援助する。さらに、イメージ・グループ体験を通じて、分析(analysis)的ではなく総合(synthesis)的に自他への関与の質について考える。</p>	オムニバス方式
	心理実践実習 I	<p>学内実習および学外実習(病院・学校・福祉施設)を開始する上で必要な実際の臨床的態度を身につける。また、学内外の実習において実際に事例に関わりながら臨床スタッフとしての運営業務、参加観察を通じて臨床実務に必要な実践的な知識、態度、技術を体得する。その上で後半には事例を担当し、心理査定・心理面接・集団療法・インテークカンファレンスおよびケースカンファレンスでの報告と討論等を実践的に学ぶ。実際の事例担当については、臨床心理士・公認心理師教員によるスーパーヴィジョンを受け、自身の課題と向き合う。</p>	共同
	臨床心理実習 A (心理実践実習 II)	<p>心理実践実習 I での経験および臨床心理基礎実習での学修を基に、学内実習および学外実習(病院・学校・福祉施設)において実際に事例に関わりながら臨床スタッフとしての運営業務、参加観察を通じて臨床実務に必要な実践的な知識、態度、技術を体得し、習熟させるとともに、複数の事例を担当し、心理査定・心理面接・集団療法・インテークカンファレンスおよびケースカンファレンスでの報告と討論等を実践的に学ぶ。実際の事例担当については、臨床心理士・公認心理師教員によるスーパーヴィジョンを受け、自身の課題と向き合う。</p>	共同
	臨床心理実習 B	<p>臨床心理士の資格取得のために、臨床心理活動の実践的実習を実施する。実習を通して、臨床心理学にもとづく知識や技術を用いて、人間の“こころ”の問題にアプローチする“心の専門家”としての実践力を習得すること、臨床心理的支援を要する者とその関係者の理解を目指した知識や技能、ニーズの把握を習得すること、臨床心理的地域援助について実践的知識を習得することを目的とする。また、事例研究の方法について学びながら、京都橋大学心理臨床センター『心理相談研究』への投稿を想定しつつ、事例研究論文の執筆を行う。これらを通じて、高度専門職業人として、自らの専門資質の維持・発展に資する力を身につける。臨床心理士として心理的支援を要する者とその関係者への理解を深め、支援についての実践的な知識や技能およびニーズの把握等の修得を目指し、事例検討セミナーや地域援助活動への参加を実施する。これはすべて臨床心理士である担当教員の指導のもとに実施される。</p>	共同
b群	分析心理学特論	<p>C.G. Jungが提唱した分析心理学について概観する。元型 (archetype)、布置 (constellation)、全体性 (wholeness, totality) などのキー・ワードを理解するとともに、分析心理学の実践的有用性を特に強調し、その心理療法の要諦となる「個性化の過程 (process of individuation)」について理解を深める。また、治療者の「影 (shadow)」に注目し、とすれば治療者自身が「空想虚言症 (pseudologia phantastica)」的になり、被援助者を自らの自己中心的な空想から意のままに操ってしまう危険性について考える。すなわち、治療者の歪んだ空想 (fantasy) からではなく生きた想像 (imagination) によってのみ被援助者の自己治癒力は活性化されるという臨床的事実を理解する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	思春期臨床心理学特論（教育分野に関する理論と支援の展開）	思春期は、子どもから大人への過渡期であり、心身の急激な成長・変化の時期である。そのため、さまざまな不適応現象が生じやすく、疾風怒涛の時期であることが知られている。しかも、大人のような言語による面接は未だ難しく、子供を対象とする遊戯療法にはもう乗ってこないという面がある。そこで、思春期独自の心理療法の技法を用いることが必要となる。ここでは、いくつかの事例を挙げながら、具体的な面接技法について詳述する。	
	グループアプローチ特論（家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践）	家族や集団をシステムとして捉え、その関係性に働きかけるための知識と技法、セラピーグループを形成し展開させていくための知識と技法は、臨床心理学の専門家として今や必須の技能である。この講座では、家族や集団を理解するためにシステムズ・アプローチを学んだ後、一般的なグループの形成、成長といったグループプロセスの理論、および様々なグループの展開技法を学ぶ。t-グループやエンカウンターグループなど自ら選んだグループにメンバーとして参加し、経験を積むことを奨励する。	
研究演習	健康科学特別研究 I	<p>（概要）心身の健康とそれをめぐる課題、臨床的問題等を取り上げた健康科学研究の指導を行う。本科目では、主研究指導教員と副研究指導教員の2名体制によって、健康科学研究の指導を行う。主副2名の研究指導教員は、異なる分野から1名ずつがあたる。主研究指導教員は、テーマ探索、テーマ決定、研究計画の立案、パイロット研究等を一貫して指導する。副研究指導教員は異なる視点を学生に提示し、学生が研究の幅を広げるための補助的指導を行う。また、学生は研究計画について発表し、倫理的なチェックを受ける。</p> <p>（1 上北 朋子）記憶、情動、社会認知、母子関係に関する実験的研究の指導を行う。テーマに応じて、人間を含む動物を対象とした先行研究をレビューし、複数の理論を比較しながら、独自の実験計画の立案を行う。</p> <p>（3 菅野 信夫）臨床心理学で扱う教育・発達・医療の領域を中心とした研究テーマに沿って、問題設定から研究目的を吟味し、具体的な研究計画とそのための研究手法の設定について指導を行っていく。</p> <p>（5 兒玉 隆之）脳機能における①感覚運動情報処理機構、②認知情報処理機構、③運動学習（教師なし学習）のメカニズムについて探求し、こころとからだの関係を深く考察していくことをテーマに研究指導を行う。そして具体的な研究テーマから、輪読、発表、討論などを通じ具体的に研究計画を立案できるよう指導する。</p> <p>（6 坂本 敏郎）記憶、学習、情動、社会行動を制御する脳内機構、内分泌機構に関する研究指導を行う。研究テーマの斬新性、独創性、実現可能性について議論し、受講者自身が研究計画を立案できるよう指導する。</p> <p>（7 崎田 正博）身体的・心理的・社会的諸因子により生じる運動不足、生活習慣病および生活習慣病予備群の加齢に伴う骨格筋や神経の退行メカニズムとそれに伴うバランス機能低下、それらの改善を目的とした介入効果に関連する電気生理学、生化学的研究の指導を行う。教員による指導のもと研究テーマの選定、研究計画の立案、研究計画作成までを指導・援助する。</p> <p>（8 柴田 利男）幼児期から児童期・青年期における仲間関係・友人関係の成立過程、対人場面での感情認知・感情制御、社会的認知、対人行動方略の選択などのテーマに関する基本文献の講読を通して、社会性の発達に関する研究課題の発見を促し、研究計画の立案と実証研究の準備を行う。</p> <p>（9 関根 和弘）高齢者救急における問題点や高齢者に多い外因性などの事故に陥る要因およびその対応策についてのアプローチ法に関する研究指導を行い、研究計画の立案・パイロット研究までを目指す。</p> <p>（11 中西 龍一）臨床心理学、特にカウンセリングやグループワークなど臨床心理学の第三の勢力である人間性心理学をテーマとした研究の指導を行う。研究対象は心理だけではなく、音声など身体の反応を含めたホリスティックなものとする。修士論文の作成を念頭に、各自の研究テーマに沿った文献の収集と精読、研究テーマの具体化、研究計画の立案などを指導する。</p> <p>（12 永野 光朗）消費者行動や被服行動などの応用社会心理学研究をテーマとして、主として質問紙調査法を用いた研究を進めるための文献講読や研究技法を指導し、修士論文のテーマ決定を進めていく。</p>	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(③ 西本 泰久) 重症傷病者、特に心停止に至るような病態に関して、医学的な考察をもとにして、研究計画の立案とそのパイロット研究までを目指す。</p> <p>(④ 平出 敦) この授業では、研究のアイデアの創生から先行研究のレビュー、テーマの絞り込み等の研究のプロセスの基本が修得できるように指導する。領域として蘇生学を中心に、研究課題を具体化できることを目指す。</p> <p>(14 堀江 淳) 慢性閉塞性肺疾患患者の運動制限因子、早期発見遅延要因の解明を呼吸機能、身体機能に着目しつつ、多次的にアプローチすることをテーマとし、具体的な研究課題を決定するまでの過程を指導する。</p> <p>(15 松下 幸治) 臨床心理学領域におけるカウンセリング、イメージ療法や分析心理学など、個人および集団に対する心理療法をテーマとした研究指導を行う。テーマの構想や内容をディスカッションや文献精読などを通して、専門領域での独自性・独創性のある研究として明確化・具体化できるよう指導する。</p> <p>(17 村田 伸) 高齢者における健康問題、とくに虚弱化や転倒、認知機能低下などの要介護状態に陥る要因およびその対応策について、身体・認知・心理的アプローチ法に関する研究指導を行い、研究計画の立案・パイロット研究までを目指す。</p> <p>(⑥ 甲斐 義浩) 多様な運動器障害（骨、関節、筋、腱、靭帯など）と身体運動機能との関連を検討するために、3次元動態解析などの生体力学的なアウトカムとその測定手法を学び、得られたデータの処理方法を習得する。また、生体力学的な手法を用いた研究計画の立案、およびパイロット研究までを目指す。</p> <p>(⑦ 岸 太一) 心身の健康ならびに疾患に対する予防や介入・支援への生物心理社会モデルに基づいたアプローチに関する研究指導を行い、研究計画の立案および予備的研究の実施を目標とする。</p> <p>(22 ジェイムス 朋子) 人格理論やその病理に関する理論、もしくは、心理療過程理論や技法論に関して、臨床心理学領域の任意のテーマを取り上げ、臨床心理学的な研究方法を用い、学問的貢献のある学術論文作成を見直し、理論研究、研究計画の立案、データの収集までを目指す。</p> <p>(23 田中 芳幸) 健康科学の中でも、特に健康心理学分野における健康関連行動やストレス等に関する研究指導を行う。各学生が有する社会的課題に対する思いを重視しつつも、先行報告を踏まえた研究テーマ設定の重要性や研究倫理について指導する。その上で、計画の立案からパイロット研究の実施までを目的とする。</p> <p>(24 中野 英樹) 人間の健康の維持・向上のためには、こころとからだを包括的に理解することが重要である。ここでは、特に人間の身体・認知・精神心理機能について、脳情報の可視化と制御を基盤とした評価ならびにアプローチ方法に関する研究指導を行い、研究計画の立案・パイロット研究までを目指す。</p> <p>(26 前田 洋光) 社会心理学、とりわけ、消費者行動をめぐる諸問題の規定因や影響過程に関する研究指導を行う。国内外の多数の文献をもとに研究目的を明確化し、必要に応じてパイロットテストを行う。</p> <p>(⑧ 宮崎 純弥) 加齢に伴って進行する脊柱の形態学的変化が身体機能に及ぼす影響、およびその発生メカニズムと予防を含めた理学療法について検討し、文献収集・精読をした上で、仮説の設定、研究方法の決定などの研究計画の作成までを指導・援助する。</p> <p>(⑨ 安彦 鉄平) 運動器障害における身体的特性、疼痛に影響を及ぼす身体的要因、心理的要因およびその治療法を研究課題とする。研究課題に関連した文献の収集と精読、テーマの具体化、研究の目的・研究計画の立案、パイロット研究等を指導する。</p> <p>(⑩ 白岩 加代子) 加齢に伴って変化する身体機能を理解し、高齢者の健康支援につながる研究テーマについて指導する。文献収集・精読をした上で、研究課題や研究方法の決定、研究計画を作成するまでの指導・援助を行う。</p> <p>(⑪ 横山 茂樹) 体幹および下肢関節を中心とした運動器系疾患の再発防止・障害予防に着目して、障害発生のメカニズム解明とその予防に向けたエクササイズ法の開発および効果検証に関する研究テーマを取り上げて指導する。文献収集・精読をした上で、仮説の設定、研究方法の決定など研究計画を作成する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	健康科学特別研究 II	<p>(概要) 主研究指導教員は、健康科学特別研究 I において計画された研究を実施し、量的または質的なデータの収集と分析を行い、その結果を考察し、修士論文を執筆し、研究発表と討論を行うまでを一貫して指導する。副研究指導教員が心理学分野教員の場合は主観的データの取り扱い方、データの統計的あるいは質的分析の補助的指導を行い、理学療法学分野および救急救命学分野教員の場合は、生理学的データの収集法や処理法、身体面の専門知識による補助的指導を行う。</p> <p>(1 上北 朋子) 健康科学特別研究 I で作成した実験計画にそって、実験を実施する。実験データの量的分析および質的分析を行い、実験計画の見直しや実験手続きの改善を加える。複数の実験結果を統合し、先行研究と照らし合わせながら、動物行動のメカニズムや獲得過程について得られた新たな知見を修士論文としてまとめる。</p> <p>(3 菅野 信夫) 健康科学特別研究 I で作成された研究計画に沿い、文献研究・事例研究であればその読み取りや考察、調査研究であればデータの処理と結果の考察を検討し、修士論文の完成を目指す。</p> <p>(5 兒玉 隆之) 健康科学特別研究 I で立案された研究計画から、情動、認知そして運動が脳機能へどのような影響を及ぼすかをテーマの軸に、データ収集、分析および検証を行う。そして、研究論文作成に向け再検討して行く。最終的には、自らの修士論文の執筆に結びつけるとともに、関連学会への投稿、発表を目指し指導する。</p> <p>(6 坂本 敏郎) 記憶、学習、情動、社会行動を制御する脳内機構、内分泌機構に関する研究指導を行う。健康科学特別研究 I で考案した研究計画について、実験の遂行と研究ノートの記載方法、データの解析方法、修士論文の作成までを指導する。</p> <p>(7 崎田 正博) 身体的・心理的・社会的諸因子により生じる運動不足、生活習慣病および生活習慣病予備群の加齢に伴う骨格筋や神経の退行メカニズムとそれに伴うバランス機能低下、それらの改善を目的とした介入効果に関連する電気生理学、生化学的研究の指導を行う。健康科学特別研究 I で作成された研究計画書を基にデータ収集(実験)、統計解析とその結果、考察、修士論文の執筆および研究発表に至る一連の過程を指導する。</p> <p>(8 柴田 利男) 健康科学特別研究 I で立案された研究計画に基づき、社会性の発達に関する実証研究を進める。その過程で具体的なデータ収集方法、分析方針の検討、得られたデータの解釈と今後の研究に向けての展望など、修士論文の作成を指導する。</p> <p>(9 関根 和弘) 健康科学特別研究 I で作成された研究計画とパイロット研究の結果に基づき、高齢者救急における課題に関する、本調査・実験におけるデータの収集方法、データの解析方法、考察のポイントなど、修士論文の作成過程全般を指導する。</p> <p>(11 中西 龍一) 臨床心理学、人間性心理学をテーマとした研究の指導を行う。健康科学特別研究 I での成果をもとに、研究計画を遂行し、データを収集・分析し、修士論文の執筆の過程を指導する。</p> <p>(12 永野 光朗) 健康科学特別研究 I の成果に基づき、消費者行動や被服行動などの応用社会心理学研究をテーマとして修士論文の具体的な研究計画を立案し、実際に調査を行うデータ収集および論文の作成を指導する。</p> <p>(13 西本 泰久) 健康科学特別研究 I で作成された研究計画をもとに、ウツタインデータなど様々なデータを利用しながら、解析方法、考察のポイントなど、修士論文の作成過程全般を指導する。</p> <p>(14 平出 敦) 健康科学特別研究 I で具体化された研究課題をもとに、蘇生の様々な手法を駆使し、特に疫学的な統計解析を生かした分析により論文作成の過程を指導する。</p> <p>(14 堀江 淳) 健康科学特別研究 I で立案した具体的研究課題について、データ収集とあらゆる統計手法を駆使した分析から、慢性閉塞性肺疾患患者の運動制限因子、早期発見遅延要因の解明に関する多次元の考察力の修得、および修士論文作成までの過程を指導する。</p> <p>(15 松下 幸治) 健康科学特別研究 I において、明確化・具体化した研究テーマについての修士論文作成のための研究指導を行う。研究計画立案にもとづく実践研究や調査研究などによって資料を収集し、結果を分析、考察する過程を、一定の水準に到達し、独立した研究として整理および発信するための指導を行う。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(17 村田 伸) 健康科学特別研究 I で作成された研究計画とパイロット研究の結果に基づき、高齢者の健康問題とその対応策に関する、本調査・実験におけるデータの収集方法、データの解析方法、考察のポイントなど、修士論文の作成過程全般を指導する。</p> <p>(⑥ 甲斐 義浩) 健康科学特別研究 I で作成された研究計画に基づいて、運動器疾患と身体運動機能との関連を検討するために、被験者の選定・リクルート、生体力学的アウトカムの測定およびデータ処理、統計解析、結果の解釈など、修士論文の作成過程全般を指導する。</p> <p>(⑦ 岸 大一) 健康科学特別研究 I で作成した研究計画および、実施した予備的研究結果に基づいて、心身の健康ならびに疾患に対する予防や介入・支援に関する調査や実験を実施する前後における種々の指導（アウトカム設定、倫理的配慮の策定・遂行、データ解析、考察の仕方等）を行い、修士論文の作成を目指す。</p> <p>(22 ジェイムス 朋子) 健康科学特別研究 I で作成された、人格理論やその病理に関する理論、心理療法過程理論や技法論に関する研究計画と収集したデータについて、分析、考察を深め、結論としてまとめるまでの修士論文作成過程全般を指導する。</p> <p>(23 田中 芳幸) 健康科学特別研究 I で実施するパイロット研究の結果を踏まえながら研究を進展させ、修士論文の完成までを指導する。また、科学的な視座を持って研究発表を行う姿勢や態度についても教授する。健康心理学における実践的な視座も重視し、各学生自身が遂行する研究に対する社会的意義や成果の社会への還元について熟考する姿勢も身に付けるように指導する。</p> <p>(24 中野 英樹) 健康科学特別研究 I で作成された研究計画とパイロット研究の結果に基づき、人間のこころとからだ（身体・認知・精神心理機能）に関する、本調査・実験におけるデータの収集方法、データの解析方法、考察のポイントなど、修士論文の作成過程全般を指導する。</p> <p>(26 前田 洋光) 健康科学特別研究 I で学んだことを踏まえ、実験や調査等を行い、得られたデータを解析・解釈して、論理的に構造化された論文を執筆していく。以上の一連のプロセスに対して指導していく。</p> <p>(⑧ 宮崎 純弥) 健康科学特別研究 I において計画された研究に基づき、脊柱の形態学変化に着目した研究テーマについて、対象者を募集およびデータ収集・解析を実施し、その考察については、多角的な視点からを行い、修士論文の作成までを指導する。</p> <p>(⑨ 安彦 鉄平) 健康科学特別研究 I で作成された研究計画とパイロット研究の結果に基づき、運動器障害における身体的特性、疼痛に影響を及ぼす身体的要因、心理的要因およびその治療法に関する、本調査・実験におけるデータの収集方法、データの解析方法、考察のポイントなど、修士論文の作成過程全般を指導する。</p> <p>(⑩ 白岩 加代子) 健康科学特別研究 I で作成した研究計画に基づき、高齢者の健康支援や障害予防に関する研究テーマについて、本調査・データ収集を行い、結果の分析や考察など、修士論文の作成過程全般を指導・援助する。</p> <p>(⑪ 横山 茂樹) 健康科学特別研究 I で作成した研究計画に基づき、運動器系疾患の再発防止・障害予防に着目した研究テーマについて、対象者の募集およびデータ収集・解析、考察を進めていく。とくに運動器系疾患の関節機能と動作障害との関連性に焦点をあてた分析能力を涵養するとともに、修士論文の作成過程全般を指導する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(健康科学研究科健康科学専攻 (博士後期課程))			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通科目	健康科学実践研究法特論	<p>(概要) 健康科学専攻では、人間を生物心理社会的存在と捉え、心身の健康を守り、その向上と新しい生き方の創出を目的として、人間のこころとからだに多角的にアプローチする教育研究を行う。この特論では「脳機能の理解」「心的機能の理解」「身体機能の理解」を深め、健康科学研究への展望を広げていくことをテーマとする。授業では、行動神経科学領域の講義、臨床心理学領域の講義、理学療法(身体機能)領域の講義を行い、各分野の最先端の研究を紹介しながら、その内容について討論し、各領域における健康科学研究の可能性を探る。これらの講義を受けた後に、各領域の視点から、領域を越えた融合研究の可能性、これからの健康科学研究のあり方や発展について討論する。</p> <p>(オムニバス方式/全7回)</p> <p>(6 坂本 敏郎/2回) 記憶・学習、情動社会性に関わる脳内機構についての最先端の研究を紹介し、動物を対象とした基礎研究が、人間の健康と生活にどのように応用できるのかを議論する。</p> <p>(6 横山 茂樹/2回) 感覚器・中枢・運動器に関わる最先端の研究を紹介し、身体機能・運動の特性をどのように捉えて健康の増進・維持に応用するのか議論する。</p> <p>(17 岸 太一/2回) 精神疾患(統合失調症、うつ病、認知症など)に対する生物的精神医学的アプローチに基づいた研究を紹介したうえで、精神疾患の診断等における客観的指標について議論する。</p> <p>(6 坂本 敏郎・6 横山 茂樹・17 岸 太一/1回) (共同) 学生が自身の研究テーマを発表し、各領域の視点から教員がアドバイスやコメントする。また、他領域との共同研究による研究発展の可能性について学生と教員が議論する。</p>	オムニバス方式・共同 (一部)
	Scientific English	<p>(概要) 健康科学領域における研究を国際的に展開するための素養としての英語に関する科目である。英語そのものを越えて、英語を研究活動に活用する方法論を教授する。このため国際的研究活動の経験が豊富な教員を配し、健康科学の基礎から応用までを題材としながら英語での実際的なやり取りを行いながら講義する。</p> <p>(オムニバス方式/全7回)</p> <p>(4 久保山 一敏/2回) 研究活動で英語を用いることは、単に英文を読解・作成するにとどまらず、西欧世界で発達して来た論理世界へ参入することを意味する。われわれは日常においては”Yes”、”No” さえ明確に表現することをためらう日本的言語世界に身を置くが、科学的思考においては主語・述語を明確にし、用語を厳格に定義・使用し、明快な論理を構築することが必要となる。そしてそのために英語は極めて有力なツールとなる。最新の英語文献を深く読み込むこと、また英文の抄録・短報を作成することで、欧米の思考過程ひいては科学的思考を身につけることを目指す。</p> <p>(18 田中 芳幸/2回) 国際学会大会での個人発表やシンポジストとしての話題提供を行うに際して、アブストラクト等に適切な英語を用いることは、採択されるための最低限の基準である。そこで具体例を示しながら、健康科学領域での国際学会大会における採択基準に到達しうるアブストラクトの記し方を講義する。また、プレゼンテーションスライドやポスターの作成、それを用いた実際のプレゼンと質疑応答の仕方についても学習を進める。さらに、シンポジウムや講演の司会者になった際に求められる英語での話し方についても教授する。</p> <p>(19 中野 英樹/3回) 健康科学領域に関わる研究論文が国際誌に採択されることを目的として、科学英語論文の執筆(論理的な論文構成、適切な表現方法、図表の作り方など)や投稿・査読(投稿先の選定、投稿規定の理解、エディターや査読者とのやりとり、レスポンスレターの書き方など)について、具体的な例を挙げながら講義する。また、国際誌への論文投稿の際に関わってくるインパクトファクターやオープンアクセスジャーナル、英文校正などについても教授する。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	健康科学イノベーション特論	<p>(概要) 心身の健康を守り、その向上と新しい生き方の創出に資する健康科学研究を実践するために、新たな変革モデルとなる実践的研究を取り上げ、そのプロセスと研究成果に焦点を当てる。挑戦的萌芽研究や企業との共同研究の具体例から、健康科学分野のイノベーション研究を考察する。</p> <p>(オムニバス方式/全7回)</p> <p>(14 村田 伸/3回) 挑戦的萌芽研究費獲得の実績を基に、保健・医療・福祉の変革の背景を理解し、新しいアイデアを作り出すための情報収集の方法などについて学ぶ。さらに、国内外の健康科学領域とくに高齢者の介護予防に関するイノベーション研究について議論する。</p> <p>(12 堀江 淳/2回) 挑戦的萌芽研究費獲得の実績を基に、保健・医療・福祉領域における、新たな検査法、評価法を開発するうえでの着想に至るプロセス、実用性獲得までの検証方法、その現場(臨床)応用について学ぶ。また、現在、抱いている疑問点から新たな評価法を仮想し、解決に向けたイノベーション研究の進め方について議論する。</p> <p>(5 児玉 隆之/2回) 企業との共同研究実績を基に、産学連携の推進へ向け、保健・医療・福祉を基盤とする健康科学の知見をいかに応用するかについて学ぶ。また、技術の移転に止まらず、学術成果を広く社会に還元し、地域イノベーションの原動力となりうるためのイノベーション研究について考え議論する。</p>	オムニバス方式
	医療マネジメント特論	<p>(概要) 「医療と経済・政策、医療経営」「組織イノベーション」「ビジネスコミュニケーション」を学ぶことで、当該領域の主だった理論や概念を理解するとともに、研究者、教育者および高度専門職者にふさわしい研究能力と現場のイノベーションに寄与できるマネジメント能力を涵養するためのスキルを習得する。</p> <p>(オムニバス方式/全7回)</p> <p>(21 高山 一夫/3回) まず、医療経済の基本的知識について、医療経済学の対象と分析手法、諸潮流、主な概念と論争点を理解する。次に、日本と諸外国の医療制度の概要について理解を深めるとともに、医療政策学の主要概念と研究課題を学ぶ。さらに、医療経営の独自の特徴について理解するとともに、我が国の医療経営の現状と課題について討論する。</p> <p>(22 平尾 毅/2回) 組織において処理すべき情報量の決定と、組織的に情報を効率よく処理する能力の向上に関する基本的な考え方を学び、戦略的組織変革に必要な視点を身につける。また、日本の職場の働き方の特徴を理解した上で、働き方改革に求められている職場の労働編成と人材マネジメントのあり方について学ぶ。</p> <p>(23 西野 毅朗/2回) 「1対1のコミュニケーション」をテーマに、アクティブラーニング(傾聴)を中心とするノンバーバルコミュニケーションスキルを身につけ、相手に対する理解力を高めるとともに、ヒアリングを通じて相手のニーズを汲み取り、表現する力を高める。また、「1対多のコミュニケーション」をテーマとして、プレゼンテーション指導を行う。医療現場のマネジメント課題を取り上げ、それに対してどのように取り組むべきかを簡潔に提案発表してもらおう予定である。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	医学・健康教育特論	<p>(概要) この講座では、将来、医学・健康に関する教育者として活躍できる素養を身につけるために、さまざまな健康科学分野における教育に関して修練を行う。</p> <p>(オムニバス方式／全7回)</p> <p>(11 西本 泰久／3回) 医学教育などでは、近年シミュレーション教育やコーチング等の技法がよく用いられている。また、学習者の自主学習を促すようなアクティブラーニングが用いられている。これらのことを念頭に置き、古典的なカリキュラム作成法を、目的、目標設定、方略、評価の設定について概説するとともに、近年のコンピテンシーに基づいた教育技法について教授する。</p> <p>(17 岸 太一／2回) 本講義では健康教育実践に関わる論文を取り上げ、その方法論やアウトカム設定、実践上の課題や工夫を中心に批判的論考を行い、健康教育の実践者ならびに研究者としての資質のさらなる向上を図る。</p> <p>(18 田中 芳幸／2回) 健康の維持増進および疾病の予防に特化しつつ、生物-心理-社会モデルで人を捉えながら教育と研究を実践するための素養を養う。講義内では、メンタルヘルスに関する内容を中心に題材として取り上げつつ、全人的な健康と心の健康との相互関係に関する深い省察を求める。受講生自身のこのような論考を通じて、日々進歩する健康科学領域の研究成果に目を向けながら、知識のみに偏らない健康教育を展開するための資質を育む。</p>	オムニバス方式
専門科目	健康生命科学領域 生体機能学特論演習	<p>(概要) 神経や骨格筋は、加齢と生活習慣の悪化に伴う代謝異常、酸化ストレス、アポトーシスおよびネクロトーシスにより退行変性の影響を強く受け、体力の低下や疼痛発現など老化を促進させる。そこで、健康科学の視座から神経と骨格筋の組織・細胞レベルにおける組織学・生理学・分子生物学特性を説明するとともに、加齢による変化を捉える。</p> <p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(7 崎田 正博／7回) 健康科学領域である加齢に焦点をあて、神経と骨格筋の退行を組織・細胞レベルで教示する。具体的には、神経と骨格筋のホメオスタシスとその破綻を老化と生活習慣の悪化の観点から組織学・生理学・分子生物学的に教示する。</p> <p>(20 池田 哲也／7回) 疼痛に焦点を当て、痛覚の基本的な仕組み、疼痛抑制系の仕組みを学習し、さらに加齢や生活習慣の悪化によって引き起こされる慢性疼痛の代表例である、神経因性疼痛について教示する。</p>	オムニバス方式
	行動科学特論演習	<p>(概要) 記憶・学習、社会情動性に関わる脳内機構を解明するための研究に必要な実験技術やデータ解析方法を指導する。先行研究の精読と実験計画の立案、実際の研究手法の習得およびデータ解析法までを取り扱う。前半で記憶・学習の研究について、後半では情動と社会性について教授する。</p> <p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(6 坂本 敏郎／7回) 記憶・学習に関わる最先端の先行研究を精読し、これらの研究で用いられている行動テストの実施方法や神経科学的手法、統計的解析を指導する。</p> <p>(1 上北 朋子／7回) 情動・社会行動に関わる最先端の先行研究を精読し、これらの研究で用いられている行動テストの実施方法や神経科学的手法、統計的解析を指導する。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
健康・生活支援科学領域	健康回復支援科学特論演習 A	<p>(概要) 健康回復および支援のために必要な“こころとからだ”に関する健康科学理論について学ぶ。特に、脳血管障害患者、神経原性疾患患者および認知症患者の障害特性に合った脳機能からのアプローチ方法を学ぶ。さらに、行動変容に結びつく効果的な健康教育および技術について、演習（模擬事例を用いた体験）を通じて深く考察する。</p> <p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(5 児玉 隆之／7回) 神経原性疾患患者の感覚機能障害や認知症患者の認知機能障害について、それらの回復や支援に必要な危険因子や予後因子、治療介入といった予測因子について学ぶ。また、神経生理学的側面からそれらに対する評価およびアプローチ方法を学び、機能的な転帰や利得について考察する。</p> <p>(19 中野 英樹／7回) 脳血管障害患者や脊髄小脳変性症患者の運動機能障害について、それらの回復や支援に必要な危険因子や予後因子、治療介入といった予測因子について学ぶ。また、脳神経科学的側面からそれらに対する評価およびアプローチ方法を学び、機能的な転帰や利得について考察する。</p>	オムニバス方式
	健康回復支援科学特論演習 B	<p>(概要) 健康回復ならびに支援に必要な運動器障害に関する健康科学理論について学ぶ。特に運動器徒手理学療法を中心とした、体幹・脊柱の運動機能障害、四肢の運動機能障害に対するの評価方法や治療方法を考察し、同時に研究論についても学ぶ。さらに、高度な専門職として必要である、治療技術や教育指導方法についても考察する。</p> <p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(3 宮崎 純弥／7回) 脊柱運動器疾患（椎間板ヘルニア、脊柱管狭窄症、椎間関節症等）の運動機能障害について、それらの筋機能や関節機能の回復に必要な因子を検討し、その因子に対する治療方法について学ぶ。また、運動機能障害の機能的な転帰や利得について考察する。</p> <p>(4 安彦 鉄平／7回) 四肢の運動器疾患（変形性膝関節症、変形性股関節症、肩関節周囲炎等）の運動機能障害について、それらの筋機能や関節機能の回復に必要な因子を検討し、その因子に対する治療方法について学ぶ。また、運動機能障害の機能的な転帰や利得について考察する。</p>	オムニバス方式
	健康回復支援科学特論演習 C	<p>(概要) 発達・教育・臨床心理学領域における様々な心の健康問題について、実証研究および事例研究の講読、発表、討議を行う。それを通して問題の個人的および社会的背景の解明を図り、問題解決に向けた支援の方策について議論する。</p> <p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(3 菅野 信夫／7回) 臨床心理学で扱う発達・医療・教育の領域を中心に、そこで生じるさまざまな心の問題について、調査研究・事例研究・文献研究などからいくつかの論文を取りあげ、講読、発表、討議を通して、問題解決に向けた支援のあり方について検討していく。</p> <p>(8 柴田 利男／7回) 発達・教育心理学領域における対人コミュニケーション、感情コミュニケーションに起因する心理学的問題を取り上げ、その原因、個人的および社会的背景、有効な支援の方策について議論する。</p>	オムニバス方式
	健康・生活支援科学特論演習 A	<p>(概要) 近年、障害学領域において、これまでの「治療」という視点に加え、「予防」という視点が重要視されてきている。本講義では、これまでの「治療」の部分に焦点を当て、高齢者特有の疾患から生じる障害に対する高度な応用専門知識、研究の進め方等を、更に「予防」という部分に焦点を当て、健常高齢者に対する高度な応用専門知識、研究の進め方等を教員と受講者間で討議を含めながら教授する。</p> <p>(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(12 堀江 淳／7回) 高齢者特有の疾患から派生する障害（特に、循環器疾患、呼吸器疾患、代謝性疾患など内部障害を中心）についての、高度な専門知識の習得を目指す。講義の進め方は、最新の研究報告、治療法の開発などを通じて、教員と受講者間で議論しながら多く知見を習得できるよう講義を進める。また、これら領域における研究の進め方などを教授する。</p> <p>(5 白岩 加代子／7回) 高齢者特有に見られる身体機能、精神、心理機能についての理解を深め、高齢者の健康支援や介護予防につながる専門知識を習得する。さらに、高齢者の健康支援や介護予防に関する研究を学び、自ら研究者や教育者、高度専門職者として活躍できるよう育成する。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	健康・生活支援科学特論演習 B	<p>(概要) 本演習では、生物心理社会モデルの観点に基づいた人間の健康の維持・増進ならびに回復に関する支援プログラムを立案し、批判的論考を加え、健康・生活支援科学に関する実践プログラムを立案する能力の習得を目指す。授業ではプログラム開発における諸理論や健康行動に関する概念・理論を整理した後、実際に行われた健康の維持・増進ならびに回復に関する支援プログラムを参照しながら、それらのプログラムのStrong/Weak Pointを検討する。その後、受講者の関心に基づいて、その健康問題に関連した支援プログラムを立案することを到達目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(17 岸 太一/7回) 初回に健康支援プログラムや健康行動に関する概念・諸理論の解説を行い、知識の再整備をしたうえで、何らかの疾病や健康上の問題を有している人を対象とした健康回復に関する支援プログラムの立案を行っていく。疾病や健康上の問題を抱えている人は医療の対象となるが、近年の医療では費用対効果や実施した介入の経済的観点からの評価も重視されている。本演習で立案するプログラムにおいても、臨床的効果の検証だけでなく、経済的評価や実現可能性 (feasibility) を考慮したものの策定を目指す。</p> <p>(18 田中 芳幸/7回) 健常または未病段階にある人々の心理的または行動的な生活を支援するための方法論を教授する。また支援プログラムの作成や作成したプログラムに関する討論をとおして、受講者の研究活動や実践活動に応用できるようになることも目指す。具体的には、多理論統合モデルに基づくストレスマネジメントやメンタルヘルス増進等を取り上げながら、健康の維持・増進や疾病予防に資する各人に対する効果のみでなく、多くの人々に利用してもらえる到達度の高い支援方法・プログラムを構築できるように指導する。</p>	オムニバス方式
	健康・生活支援科学特論演習 C	<p>(概要) 健康・生活支援科学としての救急医学および救急救命学に関する理論と実践を演習形式で学ぶ。救急現場でよく遭遇するcommon diseaseや外傷、中毒等を中心にした傷病者への対応、また災害医療や多数傷病者への対応など、救急医学に関する学びを深める。また、重症度・緊急度の判断、症候・病態の的確な観察と判断、救急処置、病院搬送、医師への引き継ぎまでの救急現場を想定したプレホスピタルケアを中心に教授する。</p> <p>(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(11 西本 泰久/7回) 救急現場でよく遭遇するcommon diseaseや外傷、中毒等について、それぞれの状況や病態の判断に関して考察するとともに、傷病者が社会復帰をするまでの過程に関して理解を深める。また、多数傷病者への対応や災害時の救急態勢、社会復帰までの過程について教授する。</p> <p>(10 関根 和弘/7回) 救急現場活動のcommon diseaseや外傷、中毒等の傷病者への対応法について、重症度・緊急度の判断、症候・病態の的確な観察と判断、救急処置、病院搬送、医師への引き継ぎなど一連の救急現場の視点から考察する。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
研究指導	特別研究 I	<p>(概要) 主研究指導教員および副研究指導教員の指導を受けながら、研究課題を特定のテーマに絞り込み、博士論文に取り組む準備を整える。文献検討は、最新の知見が明確になるよう国内外の論文を十分に批判し、独創性の高い研究となるよう研究目的を明確にする。その後、研究デザインや研究方法等を十分に検討し、研究計画書を作成する。</p> <p>(1 上北 朋子) 動物の高次認知機能を支える神経基盤について、明らかにすべき事項を絞りこみ、研究テーマを決定する。必要とする実験的操作や研究計画を整理する。また、脳損傷、薬理学的手法など、高度な実験手技を獲得するための指導を行う。</p> <p>(3 菅野 信夫) 健康回復支援の視点から、臨床心理学で扱う教育・発達・医療の領域を中心とした研究テーマに沿って、問題設定から研究目的を吟味し、具体的な研究計画とそのための研究手法の設定について指導を行っている。</p> <p>(5 兒玉 隆之) 健康・生活支援科学に関する新たな知の構築に向けて、研究デザインと研究方法を検討し、研究計画を立案する。とくに、脳卒中の感覚運動機能障害・高次脳機能障害の回復に寄与する評価や介入方法に関する研究計画について指導する。</p> <p>(6 坂本 敏郎) マウスやラットを対象とし、記憶、学習、情動、社会行動を制御する脳内機構、内分泌機構を明らかにする研究について指導する。先行研究の精読、研究テーマの独創性と実現可能性について議論し、学生自身が研究計画を立案できるよう指導する。</p> <p>(7 崎田 正博) 健康科学領域における生体機能学の範疇で、特に加齢や生活習慣病発症メカニズムおよびその予防・改善に向けた神経・骨格筋の基礎・臨床研究(動物実験を含む)に関する実験手法の指導と研究計画の立案を検討する。</p> <p>(10 関根 和弘) 健康・生活支援科学としての救急救命の現場に関する「救急現場学」の構築に向けて、救急現場の問題点の抽出をし、病院前救護の学問体系の確立方法の研究計画を立案する。</p> <p>(11 西本 泰久) 健康・生活支援科学としての救急救命に関する医学的な新たな知の構築に向けて、研究のデザインや研究方法を検討し、研究計画を立案する。特に、心停止に至るような病態を中心に研究計画を立案する。</p> <p>(① 平出 敦) 健康・生活支援科学としての救急救命に関する新たな知の構築に向けて、研究のオリジナリティを尊重した研究デザインができることをめざすとともに、研究対象者の人権や個人情報の保護など研究倫理的な側面を指導する。蘇生学領域を中心に、研究方法を検討し、研究計画を立案する。</p> <p>(12 堀江 淳) 健康・生活支援科学に関する新たな知の構築ができるよう、内部障害者に対するリハビリテーションについての問題の所在を分析する。その上で、問題解決に向けての当該研究に必要なフィールド、研究デザイン、評価指標、分析方法等の基礎知識の確認、研究計画の構築に関して指導する。</p> <p>(14 村田 伸) 健康・生活支援科学に関する新たな知の構築に向けて、研究デザインと研究方法を検討し、研究計画を立案する。とくに、高齢者の転倒予防・認知症予防・介護予防に寄与する評価や介入方法に関する研究計画について指導する。</p> <p>(② 甲斐 義浩) 健康回復支援科学としての臨床バイオメカニクス研究に関する新たな知見の構築に向けて、一連の研究デザインを検討し、妥当な研究計画を立案する。とくに、スポーツ・運動器障害における発生メカニズムの解明や予防的・治療的な運動介入の効果について、生体力学的な評価方法を用いた研究計画を指導する。</p> <p>(18 田中 芳幸) 健康的な生活を増進したり維持したりすることに結びつく研究テーマの模索や方法論、研究計画の設定について教授する。心理的ストレスや生活習慣といった精神面や行動面での健康にかかわるテーマを中心に扱い、その全人的な健康に資するための新たな知見の創出に向けた指導を行う。</p> <p>(③ 宮崎 純弥) 健康回復支援科学に関する新たな知の構築に向けて、研究デザインと研究方法を検討し、研究計画を立案する。とくに、運動器障害に対する理学療法評価方法や予防を含めた治療方法に関する研究計画について指導する。</p> <p>(⑤ 白岩 加代子) 高齢者の健康支援・障害予防に関する新たな発案に向けて、研究テーマや研究方法を検討し、研究計画を立案する。とくに健康寿命の延伸を視野に入れた研究について指導・援助する。</p> <p>(⑥ 横山 茂樹) 健康回復支援科学に関する新たな知の構築に向けて、研究デザインと研究方法を検討し、研究計画を立案する。とくに、若・中年者における運動機能障害症候群の予防に寄与する評価や介入方法に関する研究計画について指導する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	特別研究Ⅱ	<p>(概要) 特別研究Ⅰで立案した研究計画を発表し、研究指導教員および副研究指導教員の指導を受けながら、研究における倫理的な検討を十分に行う。研究計画をより洗練させるために第1回公開(中間)報告会を行い、合格することで特別研究Ⅲの過程に進む。</p> <p>(1 上北 朋子) 高次認知機能に関する独自の研究テーマについて、特別研究Ⅰで身につけた手法を用いて、複数の実験を実施する。行動実験とデータの統計的解析および結果についてのディスカッションを行う。</p> <p>(3 菅野 信夫) 特別研究Ⅰで作成された研究計画に沿い、文献研究・事例研究であればその読み取りや考察、調査研究であればデータの処理と結果の考察について検討する。</p> <p>(5 兒玉 隆之) 特別研究Ⅰで立案した健康・生活支援科学、とくに脳卒中の感覚運動機能障害・高次脳機能障害の回復に関する研究計画を進めるための指導を行う。</p> <p>(6 坂本 敏郎) 特別研究Ⅰで考案した研究計画について、実験の遂行と研究ノートの記載方法、データの解析方法を指導し、投稿論文の作成にとりかかると。</p> <p>(7 崎田 正博) 特別研究Ⅰで立案した基礎・臨床研究(動物実験を含む)に関する研究計画を進めつつ、再現性のある実験の確立と予想外の問題発生に対する修正・対応を指導していく。</p> <p>(10 関根 和弘) 特別研究Ⅰで立案した救急救命の現場に関する「救急現場学」の構築に向けて、とくに蘇生法、外傷などの救急救命処置の知識と技術の理解と実践、救急現場のコミュニケーションや病院前救急医療体制の効率化や救急医療システムの課題に関する研究計画を進めるための指導を行う。</p> <p>(11 西本 泰久) 特別研究Ⅰで立案した救急救命に関する医学的課題、特に心停止につながるような病態に関して、心停止に至らせないための方策などについて、研究計画を進めるように指導を行う。</p> <p>(① 平出 敦) 特別研究Ⅰで立案した救急救命に関する医学的課題、特に蘇生学関連の課題について、先行研究や従来の知見をもとに、課題に適した解析手法を見出して、研究のプロセスを進めるように指導を行う。</p> <p>(12 堀江 淳) 研究計画遂行に必要な諸手続きを含めた準備について指導、実行する。特に、内部障害者に対するリハビリテーションに関する研究のためのフィールド確保、調整、データ収集の準備等の具体的内容についても指導する。</p> <p>(14 村田 伸) 特別研究Ⅰで立案した健康・生活支援科学、とくに高齢者の転倒予防・認知症予防・介護予防に関する研究計画を進めるための指導を行う。</p> <p>(② 甲斐 義浩) 特別研究Ⅰで立案した臨床バイオメカニクス研究、とくにスポーツ・運動器障害の発生機序や運動介入に関する研究計画を進めるための指導を行う。</p> <p>(18 田中 芳幸) 特別研究Ⅰで設定した精神面や行動面での健康にかかわる研究テーマに基づきつつ、社会的意義を十分に達する一連の科学的研究として計画の洗練を行う。同時にデータ収集も進め、本課程内での最終的な論文を構成するための途上となる研究の一部について、発表・報告できるように指導する。</p> <p>(③ 宮崎 純弥) 特別研究Ⅰで立案した健康回復支援科学、とくに、運動器障害に対する理学療法評価方法や予防を含めた治療方法に関する研究計画を進めるための指導を行う。</p> <p>(⑤ 白岩 加代子) 特別研究Ⅰで立案した研究計画に基づき、予備調査などを行い、健康支援・障害予防に寄与する研究計画を進めるための指導・援助する。</p> <p>(⑥ 横山 茂樹) 特別研究Ⅰを踏まえた上で、健康・運動機能科学、とくに、若・中年者の運動機能障害症候群の予防に関する研究を進めるための指導を行う。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	特別研究Ⅲ	<p>(概要) 特別研究Ⅱで検討された研究課題について、研究指導教員および副研究指導教員の指導を受けながら、さらに研究活動を進める。研究活動によって得られたデータを解析し、新たな知の構築を目指して研究論文としてまとめ、審査ならびに第2回公開(最終)報告会を経て、博士論文を完成させる。</p> <p>(1 上北 朋子) 人間を含む動物の高次認知機能の脳内メカニズムや獲得プロセスについて、複数の実験データを総合的に考察することによって、新たな知見を提供し、理論構築を行う。それらを国内・海外誌に投稿し、採択されることを目指す。研究の背景から独自の発見までを博士論文にまとめる。</p> <p>(3 菅野 信夫) 特別研究Ⅱで示された考察にさらに検討を加え、問題設定や研究目的にきちんと対応した論文となるよう指導を行う。</p> <p>(5 兒玉 隆之) 特別研究Ⅱで検討された健康・生活支援科学、とくに脳卒中の感覚運動機能障害・高次脳機能障害の回復に寄与する評価方法、ならびに介入方法に関する研究について論文指導を行う。</p> <p>(6 坂本 敏郎) 特別研究Ⅱで実施した研究を投稿論文としてまとめ、採択されるまでを指導する。そして一連の研究を博士論文として完成させるまでを指導する。</p> <p>(7 崎田 正博) 特別研究Ⅱで検討された研究課題(加齢や生活習慣病発症メカニズムおよびその予防・改善に向けた神経・骨格筋の組織学・生理学・分子生物学的研究)の結果に基づき、執筆と論文投稿の指導を行う。</p> <p>(10 関根 和弘) 特別研究Ⅱで検討された救急救命の現場に関する「救急現場学」の構築に向けて、とくに蘇生法、外傷などの救急救命処置の知識と技術の理解と実践、救急現場のコミュニケーションや病院前救急医療体制の効率化や救急医療システムの課題に関する研究について論文指導を行う。</p> <p>(11 西本 泰久) 特別研究Ⅱで検討された研究課題について、副研究指導教員の指導も受けながら、さらに救急救命に関する研究活動を進め、論文作成のための指導を行う。</p> <p>(① 平出 敦) 特別研究Ⅱで検討された救急救命に関する研究課題について、さらに研究活動を進めるとともに、統計的な検証や社会的な視点からの意義づけなどの点についても検討をおこない、論文作成のための指導を行う。</p> <p>(12 堀江 淳) 特別研究Ⅱに続き、実際のデータ収集・解析、論文の作成方法、研究成果の公表方法(国際論文投稿方法等)を指導する。論文を投稿、アクセプトされるまでの一連のプロセスを教授し、研究者、教育者、高度専門職者として自立できるよう指導する。</p> <p>(14 村田 伸) 特別研究Ⅱで検討された健康・生活支援科学、とくに高齢者の転倒予防・認知症予防・介護予防に寄与する評価方法、ならびに介入方法に関する研究について論文指導を行う。</p> <p>(② 甲斐 義浩) 特別研究Ⅱで立案した臨床バイオメカニクス研究、とくにスポーツ・運動器障害の発生機序や運動介入に関する研究について、博士論文作成の指導を行う。</p> <p>(18 田中 芳幸) 特別研究Ⅱで開始した精神面や行動面にかかわる健康についての一連の研究を継続的に実施しながら、社会的に有意義な新たな知見を示す論文を執筆するための指導を行う。</p> <p>(③ 宮崎 純弥) 特別研究Ⅱで検討された健康回復支援科学、とくに、運動器障害に対する理学療法評価方法や予防を含めた治療方法に関する研究について論文指導を行う。</p> <p>(⑤ 白岩 加代子) 特別研究Ⅱで検討した課題を検証し、健康支援・障害予防に寄与する評価方法、介入方法に関する研究について、論文作成までの過程を指導・援助する。</p> <p>(⑥ 横山 茂樹) 特別研究Ⅱを踏まえた上で、健康・運動機能科学の基盤づくりとして、とくに、若・中年者の運動機能障害症候群の予防に関する論文作成を行う。</p>	

学校法人 京都橘学園 設置認可等に関わる組織の移行表

令和2年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員
京都橘大学			
文学部 日本語日本文学科	85	—	340
文学部 歴史学科	100	—	400
文学部 歴史遺産学科	55	—	220
国際英語学部 国際英語学科	90	—	360
発達教育学部 児童教育学科	140	—	560
現代ビジネス学部 経営学科	180	—	720
現代ビジネス学部 都市環境デザイン学科	150	—	600
看護学部 看護学科	95	—	380
健康科学部 心理学科	90	—	360
健康科学部 理学療法学科	66	—	264
健康科学部 作業療法学科	40	—	160
健康科学部 救急救命学科	50	—	200
健康科学部 臨床検査学科	80	—	320
計	1,221	0	4,884
健康科学部 心理学科(通信教育課程)	180	3年次 180	1,080
計	180	180	1,080

令和3年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
京都橘大学				
文学部 日本語日本文学科	85	—	340	
文学部 歴史学科	100	—	400	
文学部 歴史遺産学科	55	—	220	
国際英語学部 国際英語学科	<u>120</u>	—	<u>480</u>	定員変更(30)
発達教育学部 児童教育学科	140	—	560	
	<u>0</u>	—	<u>0</u>	令和3年4月学生募集停止
	<u>0</u>	—	<u>0</u>	令和3年4月学生募集停止
<u>経済学部 経済学科</u>	<u>240</u>	—	<u>960</u>	学部の設置(届出)
<u>経営学部 経営学科</u>	<u>260</u>	—	<u>1,040</u>	学部の設置(届出)
<u>工学部 情報工学科</u>	<u>130</u>	—	<u>520</u>	学部の設置(届出)
<u>工学部 建築デザイン学科</u>	<u>80</u>	—	<u>320</u>	学部の設置(届出)
看護学部 看護学科	95	—	380	
健康科学部 心理学科	90	—	360	
健康科学部 理学療法学科	66	—	264	
健康科学部 作業療法学科	40	—	160	
健康科学部 救急救命学科	50	—	200	
健康科学部 臨床検査学科	80	—	320	
計	<u>1,631</u>	0	<u>6,524</u>	
健康科学部 心理学科(通信教育課程)	180	3年次 180	1,080	
計	180	180	1,080	

令和2年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員
京都橘大学大学院			
文学研究科 歴史文化専攻 (博士前期課程)	6	—	12
文学研究科 歴史文化専攻 (博士後期課程)	2	—	6
現代ビジネス研究科 マネジメント専攻 (博士前期課程)	6	—	12
現代ビジネス研究科 マネジメント専攻 (博士後期課程)	2	—	6
看護学研究科 看護学専攻 (博士前期課程)	8	—	16
看護学研究科 看護学専攻 (博士後期課程)	3	—	9
健康科学研究科 健康科学専攻 (修士課程)	12	—	24
計	39	—	85

令和3年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
京都橘大学大学院				
文学研究科 歴史文化専攻 (博士前期課程)	6	—	12	
文学研究科 歴史文化専攻 (博士後期課程)	2	—	6	
現代ビジネス研究科 マネジメント専攻 (博士前期課程)	6	—	12	
現代ビジネス研究科 マネジメント専攻 (博士後期課程)	2	—	6	
看護学研究科 看護学専攻 (博士前期課程)	8	—	16	
看護学研究科 看護学専攻 (博士後期課程)	3	—	9	
	<u>0</u>	—	<u>0</u>	令和3年4月学生募集停止
<u>健康科学研究科 健康科学専攻 (博士前期課程)</u>	<u>12</u>	—	<u>24</u>	研究科の専攻の設置(認可申請)
<u>健康科学研究科 健康科学専攻 (博士後期課程)</u>	<u>3</u>	—	<u>9</u>	研究科の専攻の設置(認可申請)
計	<u>42</u>	—	<u>94</u>	